

8239 トークンリング・スタッカブル・ハブ



コマンド解説書

8239 トークンリング・スタッカブル・ハブ



コマンド解説書

お願い

本書をご使用になる前に、必ず viiページの『特記事項』をお読みください。

第 2 版 (1998 年 9 月)

原 典： GA27-4208-01
8239 Token-Ring Stackable Hub
Command Reference

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 1998.12

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1998. All rights reserved.

Translation: © Copyright IBM Japan 1998

目次

特記事項	vii
商標	vii
まえがき	ix
関連資料	ix
Web サイトへのアクセス	ix
第1章 概説	1
構文図の使用法	1
順次パラメーター	1
パラメーターの選択	1
分割	2
使用上の注意の説明	2
コマンド・インターフェースの使用法	2
コマンド・インターフェースの規則	2
例	3
第2章 8239 コマンド	5
BOOTP	5
CLEAR ACCESS_CONTROL_LIST	5
CLEAR ARP_CACHE	6
CLEAR BOOTP_RESULT	6
CLEAR COMMUNITY	7
CLEAR COUNTER	7
CLEAR EVENT_SCRIPT	8
CLEAR GROUP NAME	9
CLEAR GROUP PORT	9
CLEAR LOGIN	11
CLEAR RMON	11
CLEAR SCHEDULE	13
CLEAR SECURITY INTRUDER_LIST	13
CLEAR SECURITY PORT	14
CLEAR TR_SURROGATE_REM_SOFT_ERROR	15
CLEAR TRAP_COMMUNITY	15
CLEAR TRAP_LOG	16
DISPLAY ACCESS_CONTROL_LIST	16
DISPLAY BOOTP	17
DISPLAY CLOCK	17
DISPLAY COMMUNITY	18
DISPLAY COUNTER	18
DISPLAY EVENT_SCRIPT	19
DISPLAY GROUP	20
DISPLAY HUB	21
DISPLAY INVENTORY	21
DISPLAY IP	22
DISPLAY LOGIN	22
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE	23
DISPLAY NETWORK_MAP	23
DISPLAY PORT	25

DISPLAY RING_IO	25
DISPLAY RMON ALARM_DATA	26
DISPLAY RMON CONTROL	27
DISPLAY RMON EVENT_DATA	27
DISPLAY RMON GROUP_STATUS	28
DISPLAY RMON HISTORY_ML_DATA	29
DISPLAY RMON HISTORY_P_DATA	29
DISPLAY RMON HOST_DATA	30
DISPLAY RMON LOG_DATA	31
DISPLAY RMON MATRIX_DATA	31
DISPLAY RMON RINGSTATION_DATA	32
DISPLAY RMON STATISTICS_DATA	33
DISPLAY RMON TOPN_HOSTS_DATA	34
DISPLAY SCHEDULE	34
DISPLAY SCRIPTS	35
DISPLAY SECURITY INTRUDER_LIST	36
DISPLAY SECURITY PORT	36
DISPLAY STACK	37
DISPLAY TERMINAL	37
DISPLAY TR_SURROGATE CRS_STATION	38
DISPLAY TR_SURROGATE CRS_STATUS	39
DISPLAY TR_SURROGATE REM_ERROR_MAC_FRAME	39
DISPLAY TR_SURROGATE REM_ISOLATING	40
DISPLAY TR_SURROGATE REM_LAST_BEACON	40
DISPLAY TR_SURROGATE REM_LAST_SOFT_ERROR	41
DISPLAY TR_SURROGATE REM_NONISO_THRESHOLD_EXCD	42
DISPLAY TR_SURROGATE REM_STATUS	42
DISPLAY TR_SURROGATE REM_TOTAL_NONISO_SOFT_ERROR	43
DISPLAY TR_SURROGATE RPS_STATUS	43
DISPLAY TR_SURROGATE SURR_STATUS	44
DISPLAY TRAP_LOG	45
DISPLAY TRAP_SETTINGS	45
DISPLAY WRAP_POINTS	46
ENABLE/DISABLE BOOTP	47
ENABLE/DISABLE GROUP	47
ENABLE/DISABLE PORT	48
ENABLE/DISABLE PORT_SETTING	48
ENABLE/DISABLE PURGE_ON_INSERT	50
ENABLE/DISABLE RING_IO	50
ENABLE/DISABLE RMON	51
ENABLE/DISABLE SCHEDULE	52
ENABLE/DISABLE SECURITY_PORT	53
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE CRS_TRAPS	53
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE REM_STATUS	54
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE RPS_TRAPS	57
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS	58
ENABLE/DISABLE TRAP_SETTING	59
LOAD	61
LOGOUT	62
PING	63
REPLICATE CLOCK	64
REPLICATE LOGIN	64

REPLICATE OPERATIONAL_CODE	65
RESET_HUB	65
RESTORE_TO_FACTORY_DEFAULT	66
RETRIEVE	66
SAVE	67
SCRIPT	68
SET ACCESS_CONTROL_LIST	70
SET BOOTP_SERVER	70
SET CLOCK	71
SET COMMUNITY	72
SET EVENT_SCRIPT	73
SET GROUP NAME	74
SET GROUP PORT	75
SET HUB BEACON_THRESHOLD	75
SET HUB CHANGE_HUB_ID	76
SET HUB RENUMBER_HUB_IDS	77
SET HUB RING_SPEED	77
SET HUB SPEED_THRESHOLD	78
SET IP	79
SET LOGIN	79
SET MANAGEMENT_INTERFACE 802.5_GROUP	81
SET MANAGEMENT_INTERFACE ACTIVE_MONITOR_PARTICIPATION	81
SET MANAGEMENT_INTERFACE ADMINISTRATIVE_MODE	82
SET MANAGEMENT_INTERFACE ARP_RESOLVE_METHOD	82
SET MANAGEMENT_INTERFACE DIAGNOSTICS_WRAP	83
SET MANAGEMENT_INTERFACE EARLY_TOKEN_RELEASE	84
SET MANAGEMENT_INTERFACE LOCALLY_ADMIN_ADDRESS	85
SET MANAGEMENT_INTERFACE MAC_ADDRESS_TYPE	85
SET MANAGEMENT_INTERFACE RMON2_MODE	86
SET MANAGEMENT_INTERFACE RPS_TRAPS	87
SET MANAGEMENT_INTERFACE SURROGATE_GROUP	88
SET MANAGEMENT_INTERFACE SYSTEM_CONTACT	88
SET MANAGEMENT_INTERFACE SYSTEM_LOCATION	89
SET MANAGEMENT_INTERFACE SYSTEM_NAME	89
SET RMON ALARM	90
SET RMON EVENT	92
SET RMON HISTORY_CONTROL	93
SET RMON TOPN_HOSTS	94
SET SCHEDULE	95
SET SECURITY_PORT ACTION_ON_INTRUSION	96
SET SECURITY_PORT CAPTURE	97
SET SECURITY_PORT MAC_ADDRESS	98
SET TERMINAL BAUD	99
SET TERMINAL PROMPT	100
SET TERMINAL TIMEOUT	101
SET TR_SURROGATE CRS_STATION	102
SET TR_SURROGATE SEGMENT_NUMBER	103
SET TRAP_COMMUNITY	103
WRAP UNWRAP	105
用語集	107

索引 111

特記事項

本書において、日本では発表されていないIBM製品（機械およびプログラム）、プログラミングまたはサービスについて言及または説明する場合があります。しかし、このことは、弊社がこのようなIBM製品、プログラミングまたはサービスを、日本で発表する意図があることを必ずしも示すものではありません。本書で、IBMライセンス・プログラムまたは他のIBM製品に言及している部分があっても、このことは当該プログラムまたは製品のみが使用可能であることを意味するものではありません。これらのプログラムまたは製品に代えて、IBMの知的所有権を侵害することのない機能的に同等な他社のプログラム、製品またはサービスを使用することができます。ただし、IBMによって明示的に指定されたものを除き、これらのプログラムまたは製品に関連する稼働の評価および検証はお客様の責任で行っていただきます。

IBMおよび他社は、本書で説明する主題に関する特許権（特許出願を含む）商標権、または著作権を所有している場合があります。本書は、これらの特許権、商標権、および著作権について、本書で明示されている場合を除き、実施権、使用権等を許諾することを意味するものではありません。実施権、使用権等の許諾については、下記の宛先に、書面にてご照会ください。

〒106-0032 東京都港区六本木3丁目2-31
AP事業所
IBM World Trade Asia Corporation
Intellectual Property Law & Licensing

商標

IBM は、米国またはその他の国において IBM Corporation の商標です。

UNIX は、米国またはその他の国において X/Open Company Limited. のみがライセンスを供与する登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT、および Windows 95 のロゴは、Microsoft Corporation の商標または登録商標です。

その他の会社名、製品名、およびサービス名は他社の商標またはサービス・マークになっている場合があります。

まえがき

本書では、8239 トークンリング・スタッカブル・ハブ (8239) の管理およびネットワークのモニターに使用するコマンドについて説明します。各管理コマンドに固有の情報を調べたい場合に、本書を利用してください。

コマンドはアルファベット順に並んでいます。各コマンドの説明には、以下の内容が含まれています。

- コマンドの定義
- コマンド構文
- パラメーター・オプション
- 例
- 関連コマンド

関連資料

以下の資料が、8239 トークンリング・スタッカブル・ハブ Softcopy Library CD-ROM (08L3308) に入った表示可能なソフトコピー形式で、製品に付属しています。

- 8239 トークンリング・スタッカブル・ハブ セットアップと使用者の手引き GA88-6487
- 8239 トークンリング・スタッカブル・ハブ コマンド解説書 GA88-6486

この CD-ROM は、8239 の最初の注文内容とともに出荷されます。

以下の追加資料は、ハードコピーで出荷されます。

- 8239 *Token-Ring Stackable Hub Quick Reference*, GX27-4047
- 安全上の注意 - はじめにお読みください SD21-0030
- *License Agreement for Machine Code*, Z125-5468

最新版の 8239 MIB または 8239 操作コードは、次の Web サイトから入手してください。

<http://www.networking.ibm.com/support/8239>

トークンリング・アーキテクチャーの全般的な説明については、*Token-Ring Network Architecture*, SC30-3374 を参照してください。

Web サイトへのアクセス

この IBM Web ページで、製品情報を提供しています。

<http://www.networking.ibm.com/support/8239>

第1章 概説

この章では、次のものの用法について説明します。

- 構文図
- コマンド・インターフェース

構文図の使用方法

この項では、本書の構文図の用法を、例を示しながら説明します。例では、特定の順序で選択しなければならないパラメーター、リストから 1 つだけを選択しなければならないパラメーター、および分割されていて異なるサブセットが必要なパラメーターを示します。これらの例では、**太字**とイタリック体の語が使用されていることに注意してください。**太字**は本書全体で使用されていますが、下記の例と第 2 章のコマンドの中では、**太字**の語はキーボードからの入力を表しています。また、下記の例および本書全体にあるイタリック体の語は、ユーザーが指定しなければならない変数を表しています。たとえば、*hub_id* が変数の例です。

順次パラメーター

```
set event_script  
▶▶—set event_script—script_name—rmon_index—▶▶
```

図 1. 順次パラメーター

図 1 では、**set event_script** がコマンドです。変数 *script_name* と *rmon_index* は必須のパラメーター、つまり順次パラメーターです。

たとえば、RMON イベント 5 の発生時に実行する “script_1” という名前のスクリプトを割り当てるには、次のコマンドを使用します。

```
set event_script script_1 5
```

パラメーターの選択

```
display hub  
▶▶—display hub—

|               |
|---------------|
| all           |
| <i>hub_id</i> |

—▶▶
```

図 2. パラメーターの選択

図 2 では、パラメーター **all** と *hub_id* のいずれか 1 つを選択しなければなりません。**all** はキーワードで、*hub_id* はハブ ID を表す数値で置き換える必要がある変数です。

たとえば、ハブ 3 のハブ情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

```
display hub 3
```

分割

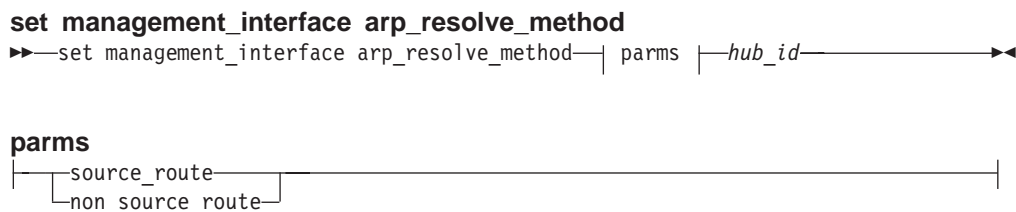


図3. 分割

図3 のコマンドでは、1 つの図には入りきれない数多くの項目があるため、**parms** で示したコマンドの一部を分割して、別に指定しています。

たとえば、ARP 要求にソース・ルーティング・ビットを含まないようハブ 1 を設定するには、次のコマンドを使用します。

```
set management_interface arp_resolve_method non_source_route 1
```

使用上の注意の説明

各コマンドの説明には、使用上の注意の項があります。ここでは、これらの注意の意味を詳しく説明しておきます。

8239 モデル 1 専用コマンド: このコマンドは、8239 モデル 1 に接続されている場合にのみ発行することができます。

8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド: このコマンドは、8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のいずれかに接続されている場合に発行することができます。

管理者専用コマンド: このコマンドは、管理者アクセス権をもっている場合にのみ発行することができます。

管理者またはユーザーのコマンド: このコマンドは、管理者アクセス権またはユーザー・アクセス権で発行することができます。

ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能: このコマンドは、コマンドを発行した 8239 でのみ実行されます。スタック内のその他のハブは影響を受けません。

コマンド・インターフェースの使用法

この項では、端末インターフェースの使用法を説明します。ログイン時に表示されるメニューを示すとともに、コマンドおよびパラメーターの選択を容易にするいくつかのヒントも示します。

コマンド・インターフェースの規則

モデル 1 のコマンド・インターフェースのメインパネルを次に示します。

```
8239 Login Prompt
Login:admin
Password:mypassword
```

```
Main Menu - Accepted inputs:
 1) bootp
 2) clear
 3) disable
 4) display
 5) enable
 6) help
 7) load
 8) logout
 9) ping
10) replicate
11) reset_hub
12) restore_to_factory_default
13) retrieve
14) save
15) set
16) script
17) unwrap
18) wrap
```

```
Type 'help' for information
```

```
?=Help>
```

注: パスワードがヌル (省略時値) の場合には、パスワードの入力を求める行は表示されません。

8239 にログオンした後、コマンド・インターフェースを使用してスタックを管理します。以下の指針、特殊キー、およびショートカットを使用してください。

- **Esc** キーを押すと、端末プロンプトに戻ります。
- **shift** と **?** を押すと、各コマンドに入力できる値のリストが表示されます。
- 省略時の値または現行の設定値は、大括弧内に表示されます。
- **Enter** キーを押すと、大括弧内に表示された値を受け入れます。
- コマンドでは、大文字小文字の区別はありません。
- コマンドは、次の方法で発行することができます。
 - コマンド全体を入力する。
 - コマンドの一部を入力し、スペース・バーを押す。
 - コマンドの次に表示されている番号を入力する。コマンドを表す番号は、8239 8239 モデル 1 と 8239 モデル 2 で異なっています。
- **Tab** キーを押すと、入力した内容に一致する最初のコマンドを選択します。 **Tab** キーを繰り返し押すことによって、入力した内容に一致するすべてのコマンドを折り返しすることができます。
- 端末プロンプトで **help** と入力すると、日常タスクの実行に関するヒントが表示されます。

例

次の表は、端末インターフェースを使用していくつかの一般的な管理タスクを実行する方法を説明したものです。例では、以下のスタック構成を使用しているものとします。

- スタックは 1 つの8239 モデル 1 と 2 つの8239 モデル 2 で構成されています。
- 8239 モデル 1 のハブ ID は 1、8239 モデル 2 のハブ ID は 2 と 3 です。
- ハブ 1 には **RI/RO** モジュール が含まれています。
- IP はハブ 1 で構成されます。IP アドレスは 9.197.4.67、サブネット・マスクは 255.255.255.0、省略時のゲートウェイは 9.197.4.1 です。

- ASCII 端末は、8239 8239 モデル 1 (ハブ 1) の EIA-232 ポートに接続されています。

タスク	処置
外部装置およびそのポートをスタック・データ・リングから除去する。	wrap ring_io both 1 と入力し、 Enter キーを押す。
外部装置およびそのポートをスタック・データ・リングに挿入する。	unwrap ring_io both 1 と入力し、 Enter キーを押す。
ハブ 2 をスタック・データ・リングから除去する。	wrap data_io both 2 と入力し、 Enter キーを押す。
ハブ 2 をスタック・データ・リングに挿入する。	unwrap data_io both 2 と入力し、 Enter キーを押す。
ハブ 1 で IP をセットアップする。	<p>set ip 1 と入力し、Enter キーを押す。</p> <p>プロンプトが表示されたら以下の情報を入力し、それぞれの値の後に Enter キーを押す。</p> <p>IP アドレス: 9.197.4.67 と入力する。</p> <p>サブネット・マスク: 255.255.255.0 と入力する。</p> <p>省略時のゲートウェイ: 9.197.4.1 と入力する。</p>
スタックの状況を調べる。	display stack と入力し、 Enter キーを押す。
ハブ 2 の状況を調べる。	display hub 2 と入力し、 Enter キーを押す。
ハブ 2 のポート 4 の状況を調べる。	display port 2.4 と入力し、 Enter キーを押す。
ハブ 1 のすべてのポートを使用可能にする。	enable port 1.all と入力し、 Enter キーを押す。
ハブ 2 のポート 4 を使用不可にする。	disable port 2.4 と入力し、 Enter キーを押す。

第2章 8239 コマンド

この項では、8239 モデル 1 および 8239 モデル 2 に有効な端末インターフェース・コマンドについて説明します。各コマンドを、必須テキストと可変テキストを含む構文図の形式で示します。また構文図の他に、コマンドの使用上の注意と制約事項、パラメーターの説明、コマンドの例、および該当するものがあれば関連するコマンドも示します。

BOOTP

BOOTP コマンドを使用すると、BOOTP サーバーの `bootptab` ファイルから 8239 モデル 1 に、構成をダウンロードすることができます。BOOTP は、ユーザーの介在なしで装置が動的に自己構成できるようにする、UDP/IP ベースのプロトコルです。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

bootp

▶▶—bootp—▶▶

関連コマンド

CLEAR BOOTP_RESULT
DISPLAY BOOTP
ENABLE/DISABLE BOOTP
SET BOOTP_SERVER

CLEAR ACCESS_CONTROL_LIST

このコマンドを使用すると、アクセス制御リストから項目を除去することができます。除去したい項目のインデックス番号を表示するには、`DISPLAY ACCESS_CONTROL_LIST` を使用してください。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear access_control_list

▶▶—clear access_control_list—*index*—▶▶

index クリアするアクセス制御リストのインデックス番号を指定します。DISPLAY ACCESS_CONTROL_LIST コマンドで、項目番号を表示することができます。

例

次のコマンドは、アクセス制御リストの項目 1 を削除します。

```
clear access_control_list 1
```

関連コマンド

```
DISPLAY ACCESS_CONTROL_LIST
```

```
SET ACCESS_CONTROL_LIST
```

CLEAR ARP_CACHE

このコマンドを使用すると、アドレス解決プロトコル (ARP) テーブル・キャッシュをクリアすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

clear arp_cache

```
▶▶—clear arp_cache—hub_id—————▶▶
```

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 1 の arp キャッシュをクリアします。

```
clear arp_cache 1
```

関連コマンド

```
DISPLAY IP ARP_CACHE
```

CLEAR BOOTP_RESULT

このコマンドを使用すると、現行の BOOTP の結果をクリアすることができます。BOOTP の結果については、17ページの『DISPLAY BOOTP』を参照してください。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear bootp_result

```
▶▶—clear bootp_result—————▶▶
```

例

次のコマンドは、ハブから BOOTP 設定値をクリアします。

```
clear bootp_result
```

関連コマンド

```
BOOTP  
DISPLAY BOOTP  
ENABLE/DISABLE BOOTP  
SET BOOTP_SERVER
```

CLEAR COMMUNITY

このコマンドを使用すると、コミュニティ・テーブルから項目をクリアすることができます。コミュニティ・テーブルは、8239 モデル 1 の SNMP エージェントと情報を交換できるステーションのグループを確立します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear comm cmd

```
▶▶—clear community—┐all┐—————▶▶  
└index┘
```

all コミュニティ・テーブルのすべての項目をクリアします。

index クリアするコミュニティ・テーブル項目を指定します。*index* は、コミュニティ・テーブル項目番号です。DISPLAY COMMUNITY コマンドで、項目番号を表示することができます。

例

次のコマンドは、コミュニティ・テーブル項目 5 をクリアします。

```
clear community 5
```

関連コマンド

```
DISPLAY COMMUNITY  
SET COMMUNITY
```

CLEAR COUNTER

このコマンドを使用すると、指定されたカウンターをゼロにリセットすることができます。このコマンドを発行すると、端末インターフェース (DISPLAY COUNTER または DISPLAY RMON STATISTICS_DATA) を用いてカウンターを表示する時点で、カウンターがゼロにリセットされます。このコマンドは、SNMP によって入手するカウンターの値には影響を与えません。

RMON EVENT_DATA ALL コマンドを使用すると、イベントのインデックス番号順リストを表示することができます。

例

次のコマンドは、RMON イベント 3 に関連したスクリプトの割り当てをクリアします。

```
clear event_script index 3
```

関連コマンド

- CLEAR RMON EVENT
- CLEAR SCRIPT
- DISPLAY EVENT_SCRIPT
- DISPLAY RMON EVENT
- DISPLAY SCRIPT

CLEAR GROUP NAME

このコマンドを使用すると、以前に入力したグループ名とそのすべてのポートをクリアすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

clear group name

```
▶—clear group name—┐all┐—————▶  
└group_name┘
```

all グループ・リストからすべてのグループ名とすべてのポートを除去します。

group_name

指定するグループ名と、それに関連するすべてのポートを除去します。

例

次のコマンドは、名前リストからグループ名 *dept.36* を除去します。

```
clear group name dept.36
```

関連コマンド

- DISPLAY GROUP
- SET GROUP NAME

CLEAR GROUP PORT

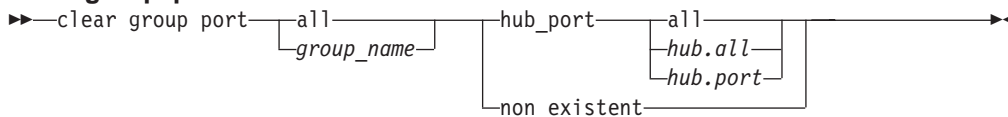
このコマンドを使用すると、以前に入力したポート - グループの割り当てをクリアすることができます。

個々のポートに操作を実行するのではなくポートのグループにまとめて操作を実行できるように、ポート・グループを構成することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

clear group port



all スタック・ユニットに関連しているすべてのグループから、指定するポートを除去します。

group_name

指定するグループから、指定するポートを除去します。

hub_port

指定するポートを除去します。

non_existent

存在しないポートをすべて除去します。存在しないポートは、現在ないポートです。

all この操作を、指定するグループ内のすべてのハブのすべてのポートに対して行うよう指定します。

hub.all 指定するハブのすべてのポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値です。

hub.port

この操作の対象となるポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値、*port* は 1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、group4 からすべてのポートをクリアします。

```
clear group port group4 hub_port all
```

例

ハブ ID 1 と 2 はスタック内にあります。コマンド `DISPLAY GROUP BLDG2` を実行すると、1.all と 3.all が表示されます。この場合、次のコマンドはグループ BLDG2 からハブ 3 のすべてのポートをクリアします。

```
clear group port BLDG2 non_existent
```

関連コマンド

- CLEAR GROUP NAME
- DISPLAY GROUP
- ENABLE/DISABLE GROUP

- SET GROUP NAME
- SET GROUP PORT

CLEAR LOGIN

このコマンドを使用すると、以前に入力したログイン名を除去することができます。

8239 では、最大 10 のユーザー名とパスワードを保管することができます。名前とパスワードによって、管理ソフトウェアへのアクセスが可能になります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear login

```
▶▶ clear login [all | index] ▶▶
```

all すべてのログイン名を除去します。

index 指定する項目のみを除去します。*index* の値は、1 から 10 までです。DISPLAY LOGIN コマンドを使用して、番号がついた項目リストを表示することができます。

例

次のコマンドは、2 番目のログイン項目をクリアします。

```
clear login 2
```

関連コマンド

- DISPLAY LOGIN
- REPLICATE LOGIN
- SET LOGIN

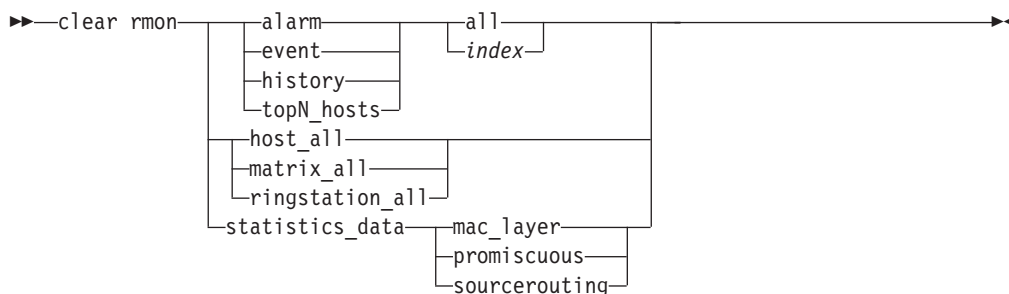
CLEAR RMON

このコマンドを使用すると、RMON テーブルから項目をクリアすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear rmon



alarm RMON テーブルを指定します。

event RMON テーブルを指定します。

history

RMON テーブルを指定します。

topN_hosts

RMON テーブルを指定します。

host_all

RMON テーブルを指定します。

matrix_all

RMON テーブルを指定します。

ringstation_all

RMON テーブルを指定します。

statistics_data

RMON カウンターを指定します。

mac_layer

この操作の対象とする RMON 統計カウンターを指定します。

promiscuous

この操作の対象とする RMON 統計カウンターを指定します。

sourcerouting

この操作の対象とする RMON 統計カウンターを指定します。

all 指定する RMON テーブルからすべての項目をクリアします。

index RMON テーブルの項目を指定します。DISPLAY RMON コマンドのいずれか (ALARM_DATA、EVENT_DATA、CONTROL HISTORY、または CONTROL TOPN_HOSTS) を使用して、テーブルの項目番号を表示することができます。

例

次のコマンドは、RMON テーブルからすべてのアラームをクリアします。

```
clear rmon alarm all
```

関連コマンド

- CLEAR RMON COUNTER
- DISPLAY RMON コマンド
- ENABLE/DISABLE RMON コマンド

- SET RMON コマンド

CLEAR SCHEDULE

このコマンドを使用すると、スケジュール・テーブルからスケジュール項目を除去することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear schedule

```
▶▶ clear schedule [all | index] ▶▶
```

all スケジュール・テーブルからすべてのスケジュール項目を除去します。

index 指定するスケジュール項目を除去します。*index* の値は 1 から 20 までの範囲です。DISPLAY SCHEDULE を使用して、現行のスケジュール・テーブルを表示することができます。

例

次のコマンドは、スケジュール・テーブルからスケジュール項目 3 をクリアします。

```
clear schedule 3
```

関連コマンド

- DISPLAY SCHEDULE
- SET SCHEDULE

CLEAR SECURITY INTRUDER_LIST

このコマンドを使用すると、セキュリティー侵害者のリストをクリアすることができます。侵害者のリストには、スタック全体で最新の 20 のセキュリティー侵害者を記述する情報が入っています。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

clear security intruder_list

```
▶▶ clear security intruder_list ▶▶
```

例

次のコマンドは、侵害者のリストをクリアします。

`clear security intruder_list`

関連コマンド

- DISPLAY SECURITY INTRUDER_LIST
- SET SECURITY コマンド

CLEAR SECURITY PORT

このコマンドを使用すると、ポートの保護 MAC アドレス・テーブルから MAC アドレスを除去することができます。

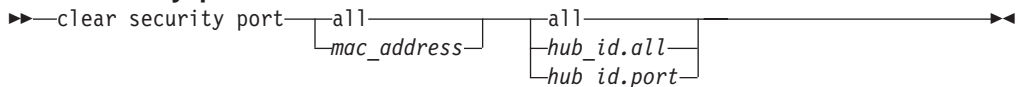
セキュリティ機能により、8239 スタックのポートに、特定の MAC アドレスのアクセスを許可することができます。8239 では、許可された MAC アドレスを使用しているステーションだけが、ポートを介して通信することができます。

許可された MAC アドレスを除去しても、セキュリティ・モードが自動的に使用不可になることはありません。ポートで許可された MAC アドレスを除去し、セキュリティ・モードを使用不可にしないと、8239 はそのポートを介したすべてのステーションの通信を禁止します。ポートのセキュリティを使用可能または使用不可にするには、ENABLE/DISABLE SECURITY を使用してください。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

clear security port



all 指定されたポートのすべての MAC アドレスを除去します。

mac_address

指定されたポートで、MAC アドレスを指定します。6 つの 16 進バイトをコロンで区切って並べたアドレスを、入力してください。

all すべてのハブのすべてのポートを指定します。

hub_id.all

指定されたハブのすべてのポートで、指定の MAC アドレスを除去します。

hub_id.port

この操作の対象となるポートを指定します。hub_id は 1 から 8 までの値、port は 1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、ハブ ID 7 のハブのすべてのポートについて、MAC アドレス 10:00:5a:77:0e:a2 をクリアします。

```
clear security port 10:00:5a:77:0e:a2 7.all
```

関連コマンド

- DISPLAY SECURITY PORT
- ENABLE/DISABLE SECURITY_PORT
- SET SECURITY コマンド

CLEAR TR_SURROGATE_REM_SOFT_ERROR

このコマンドを使用すると、トークンリング・サロゲート情報をクリアすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear tr_surrogate_rem_soft_error

▶▶—clear tr_surrogate_rem_soft_error—▶▶

例

次のコマンドは、トークンリング・サロゲート REM 合計非分離ソフト・エラー情報をクリアします。

```
clear tr_surrogate_rem_soft_error
```

関連コマンド

- DISPLAY TR_SURROGATE REM_TOTAL_NONISO_SOFT_ERROR
- DISPLAY TR_SURROGATE SURR_STATUS

CLEAR TRAP_COMMUNITY

このコマンドを使用すると、トラップ・コミュニティ・テーブルから項目をクリアすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear trap_community

▶▶—clear trap_community—

all
index

—▶▶

all トラップ・コミュニティ・テーブルのすべての項目を除去します。

index クリアするコミュニティ・テーブル項目を指定します。DISPLAY COMMUNITY コマンドで、項目番号を表示することができます。

例

次のコマンドは、トラップ・コミュニティ・テーブル項目番号 5 をクリアします。

```
clear trap_community 5
```

関連コマンド

- DISPLAY COMMUNITY
- SET TRAP_COMMUNITY

CLEAR TRAP_LOG

このコマンドを使用すると、トラップ・ログの情報を消去することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

clear trap_log

```
▶▶—clear trap_log—————▶▶
```

例

次のコマンドは、トラップ・ログをクリアします。

```
clear trap_log
```

関連コマンド

- DISPLAY TRAP_LOG

DISPLAY ACCESS_CONTROL_LIST

このコマンドを使用すると、特定のコミュニティで 8239 にアクセスできる IP アドレスをリストすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display access_control_list

```
▶▶—display access_control_list—————▶▶
```

例

次のコマンドは、コミュニティのアクセス制御リストを表示します。

display access_control_list

関連コマンド

CLEAR ACCESS_CONTROL_LIST
SET ACCESS_CONTROL_LIST

DISPLAY BOOTP

このコマンドを使用すると、現行の BOOTP 設定値をリストすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display bootp

▶▶—display bootp—▶▶

例

次のコマンドは、現行の BOOTP 設定値を表示します。

display bootp

関連コマンド

BOOTP
CLEAR BOOTP
ENABLE/DISABLE BOOTP
SET BOOTP_SERVER

DISPLAY CLOCK

このコマンドを使用すると、8239 の内部クロックの現行設定値を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display clock

▶▶—display clock—▶▶

例

次のコマンドは、現行のクロック設定値を表示します。

display clock

関連コマンド

REPLICATE CLOCK

SET CLOCK

DISPLAY COMMUNITY

このコマンドを使用すると、コミュニティー・テーブルおよびコミュニティー・トラップ・テーブルの、現行のコミュニティー設定値をリストすることができます。

RMON 項目については、8239 MIB または SET TRAP_COMMUNITY RMON コマンドを使用して追加した項目だけが表示されます。RMON 2 MIB を使用して設定された項目は、表示されません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display community

▶▶—display community—▶▶

例

次のコマンドは、現行のコミュニティー設定値を表示します。

display community

関連コマンド

CLEAR COMMUNITY

CLEAR TRAP_COMMUNITY

SET COMMUNITY

SET TRAP_COMMUNITY

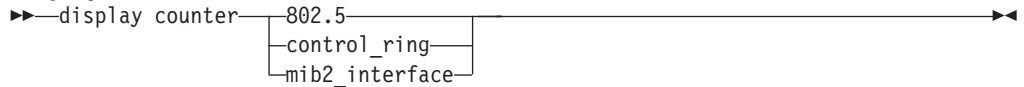
DISPLAY COUNTER

このコマンドを使用すると、MAC アドレスが割り当てられているセグメントの統計をレポートすることができます。最後のクリアまたはリセット後の、すべてのカウンターが表示されます。802.5 および MIB-II カウンターは、管理インターフェース・モードが変更された場合にもクリアされます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display counter



802.5 管理インターフェースの 802.5 インターフェース・テーブルおよび統計テーブルを表示します。統計カウンターが増加するには、管理インターフェースに 802.5_GROUP が使用可能になっていなければなりません。

control_ring

ローカル・ハブの制御リング・インターフェースのエラー・カウンターを表示します。

mib2_interface

管理インターフェースの MIB-II インターフェース・グループを表示します。

例

次のコマンドは、管理インターフェースのトークンリング統計を表示します。

```
display counter 802.5
```

関連コマンド

```
CLEAR COUNTER  
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE  
SET MANAGEMENT_INTERFACE 802.5_GROUP
```

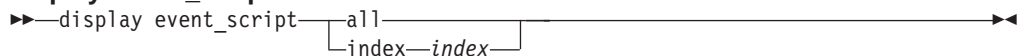
DISPLAY EVENT_SCRIPT

このコマンドを使用すると、指定された RMON イベントの発生時に実行するスクリプトの割り当てを、表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display event_script



all スクリプト - イベントの割り当てをすべて表示します。

index *index*

スクリプトを起動する RMON イベントのインデックス番号。 DISPLAY RMON EVENT_DATA を使用すると、イベントのインデックス番号順リストを表示することができます。

例

次のコマンドは、スクリプト - イベントの割り当てをすべてリストします。

```
display event_script all
```

関連コマンド

```
CLEAR EVENT_SCRIPT  
CLEAR SCRIPT  
DISPLAY RMON EVENT_DATA  
DISPLAY SCRIPT
```

DISPLAY GROUP

このコマンドを使用すると、特定のポート・グループに関連するポートを表示したり、すべてのポート・グループを表示したりすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display group

```
▶▶ display group [all | group_name] ▶▶
```

all すべてのグループに属するポートを表示します。

group_name

指定するグループに属するポートを表示します。

例

次のコマンドは、すべてのグループに関連するすべてのポートを表示します。

```
display group all
```

関連コマンド

```
CLEAR GROUP NAME  
CLEAR GROUP PORT  
ENABLE/DISABLE GROUP  
SET GROUP NAME  
SET GROUP PORT
```


関連コマンド

なし

DISPLAY IP

このコマンドを使用すると、スタックで構成されているネットワークのインターネット・プロトコル情報を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

display ip

▶▶ display ip — address — hub_id —▶▶
 └─ arp_cache ─┘ └─ all ─┘

address

IP アドレス、サブネット・マスク、およびゲートウェイを表示します。

arp_cache

8239 の現行の ARP キャッシュを表示します。

hub_id

この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

all スタック内のすべての 8239 モデル 1 の IP パラメーターを表示します。

例

次のコマンドは、8239 ネットワーク・インターフェースに関する IP 情報を表示します。

```
display ip address
```

関連コマンド

```
CLEAR ARP_CACHE  
SET IP
```

DISPLAY LOGIN

このコマンドを使用すると、ログイン・テーブルを表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display login

```
▶▶—display login—▶▶
```

例

次のコマンドは、ログイン・テーブルを表示します。

```
display login
```

関連コマンド

```
CLEAR LOGIN  
REPLICATE LOGIN  
SET LOGIN
```

DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE

このコマンドを使用すると、8239 の管理インターフェースに関する構成情報と状況情報を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

display management_interface

```
▶▶—display management_interface—▶▶
```

```
└─all─┐  
└─hub_id─┘
```

all スタック内のすべての 8239 モデル 1 に関する情報を表示します。

hub_id この操作を行うハブを指定します。**hub_id** は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 1 の管理インターフェースに関する情報を表示します。

```
display management_interface 1
```

関連コマンド

```
SET MANAGEMENT_INTERFACE コマンド
```

DISPLAY NETWORK_MAP

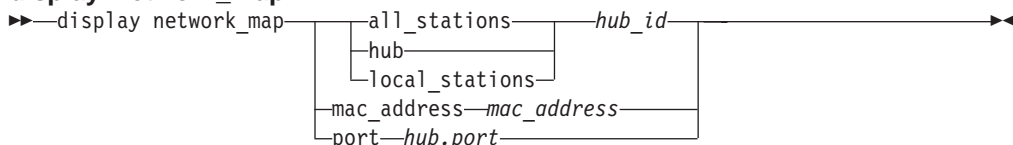
このコマンドを使用すると、トークンリング・ネットワーク上の指定するステーションの MAC アドレスを表示することができます。MAC アドレスのない装置のアドレスは、“MAC-less Device” と表示されます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド

- 管理者またはユーザーのコマンド

display network_map



all_stations

指定するハブのデータ・セグメントに挿入されている、ローカル接続および外部接続のすべてのステーションを表示します。ステーションは、トークン・フローの順にリストされます。外部接続されているステーションおよびすでに 8 つの MAC アドレスが割り当てられているポートに接続されているステーションは、*hub.port* の位置に “External” とリストされます。“External” ステーションを表示するには、RMON リング・ステーション・グループを管理インターフェースに対して使用可能にしなければなりません。

all_stations は 8239 モデル 1 専用コマンドです。

hub 指定するハブのポートに挿入されているステーションのみを、トークン・フローの順に表示します。

local_stations

指定するハブのデータ・セグメント上で、ハブに直接接続されているステーションを表示します。RI/RO モジュールに接続されている潜在的なステーションは、セグメントのどの 8239 モデル 1 にも含まれません。ポートごとに最大 8 つのステーションが表示されます。

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

mac_address

指定する MAC アドレスのポート番号を表示します。

mac_address

6 つの 16 進バイトをコロンで区切って並べたアドレスを指定します。

port 指定する *hub.port* の MAC アドレスを表示します。

hub.port

1 から 8 までのハブ ID を指定します。*port* はポート番号で、1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、ハブ 3 と同じセグメント上のすべてのステーションを表示します。

```
display network_map all_stations 3
```

次のコマンドは、ハブ 3 と同じスタック内のハブおよびハブ 3 と同じデータ・セグメントのハブのポートに接続されているステーションを、すべて表示します。

```
display network_map local_stations 3
```

関連コマンド

DISPLAY RMON GROUP_STATUS

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

all スタック内のすべての 8239 モデル 1 に関する情報を表示します。

例

次のコマンドは、ハブ 1 の詳細名リングイン/リングアウト情報を表示します。

```
display ring_io 1
```

関連コマンド

ENABLE/DISABLE RING_IO

WRAP/UNWRAP RING_IO

DISPLAY RMON ALARM_DATA

このコマンドを使用すると、RMON アラーム・グループのデータを表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon alarm_data

```
▶▶—display rmon alarm_data—index————▶▶  
                                  └──all──┘
```

index 表示するアラームを指定します。

all すべてのアラームを表示します。

例

次のコマンドは、RMON アラーム項目 1 を表示します。

```
display rmon alarm_data 1
```

関連コマンド

CLEAR RMON ALARM

ENABLE/DISABLE RMON ALARM

SET RMON ALARM

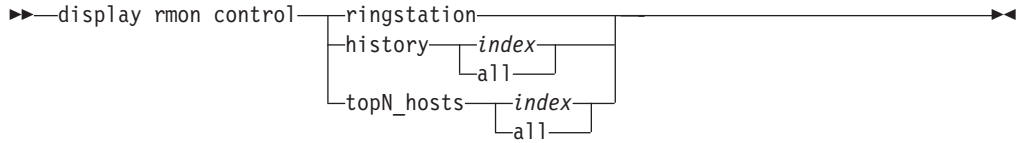
DISPLAY RMON CONTROL

このコマンドを使用すると、RMON 制御テーブルのデータを表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon control



ringstation

RMON グループを指定します。

history

RMON グループを指定します。

topN_hosts

RMON グループを指定します。

index RMON 制御テーブル内の項目を指定します。*index* は、制御テーブル項目を指定する整数です。

all RMON 制御テーブル内のすべての項目を表示します。

例

次のコマンドは、リング・ステーション制御テーブルを表示します。

```
display rmon control ringstation
```

関連コマンド

- CLEAR RMON コマンド
- DISPLAY RMON コマンド
- ENABLE/DISABLE RMON コマンド
- SET RMON コマンド

DISPLAY RMON EVENT_DATA

このコマンドを使用すると、RMON イベント・グループのデータを表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon event_data

▶▶—display rmon event_data—index
all————▶▶

index 表示するイベントを指定します。

all すべてのイベントのリストを指定します。

例

次のコマンドは、RMON イベント項目 1 を表示します。

```
display rmon event_data 1
```

関連コマンド

```
CLEAR RMON ALARM  
CLEAR RMON EVENT  
ENABLE/DISABLE RMON ALARM  
ENABLE/DISABLE RMON EVENT  
SET RMON ALARM  
SET RMON EVENT
```

DISPLAY RMON GROUP_STATUS

このコマンドを使用すると、RMON グループ状況を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon group_status

▶▶—display rmon group_status————▶▶

例

次のコマンドは、ローカル 8239 のRMON グループ状況を表示します。

```
display rmon group_status
```

関連コマンド

```
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE  
ENABLE/DISABLE RMON  
SET MANAGEMENT_INTERFACE RMON2_MODE
```

DISPLAY RMON HISTORY_ML_DATA

このコマンドを使用すると、RMON 活動記録グループで収集された MAC レイヤー統計を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon history_ml_data

▶▶—display rmon history_ml_data—control_index—sample_index—▶▶
all

control_index

RMON 活動記録制御テーブルで、表示したい活動記録のインデックスを指定します。

sample_index

表示したい活動記録サンプルを指定します。sample_index は、活動記録サンプルを指定する番号です。値の範囲は、収集されているサンプルの数によって異なります。

all すべての活動記録サンプルを表示します。

例

次のコマンドは、ハブ 1 の RMON 活動記録グループ MAC レイヤー統計の、保管されているすべてのサンプルを表示します。

```
display rmon history_ml_data 1 all
```

関連コマンド

CLEAR RMON HISTORY
ENABLE/DISABLE RMON
SET RMON HISTORY_CONTROL

DISPLAY RMON HISTORY_P_DATA

このコマンドを使用すると、RMON 活動記録グループで収集されたその他のネットワーク統計を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon history_p_data

▶▶—display rmon history_p_data—control_index—sample_index—
all

control_index

RMON 活動記録制御テーブルから、表示したい活動記録のインデックスを指定します。

sample_index

表示したい活動記録サンプルを指定します。*sample_index* は、活動記録サンプルを指定する番号です。値の範囲は、収集されているサンプルの数によって異なります。

all すべての活動記録サンプルを指定します。

例

次のコマンドは、制御インデックス 1 の RMON 活動記録グループその他のネットワーク統計の、サンプル 4 を表示します。

```
display rmon history_p_data 1 4
```

関連コマンド

```
CLEAR RMON HISTORY  
ENABLE/DISABLE RMON  
SET RMON HISTORY_CONTROL
```

DISPLAY RMON HOST_DATA

このコマンドを使用すると、RMON ホスト・テーブルのデータを表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon host_data

▶▶—display rmon host_data—
all_by_creation_order
all_by_host_address
host_address—mac_address

all_by_creation_order

ホストを、RMON エージェントが検出した順序でリストします。

all_by_host_address

すべての MAC アドレスのホスト・データをリストします。

host_address

指定する MAC アドレスのホスト・データをリストします。

mac_address

6 つの 16 進バイトをコロンで区切って並べた MAC アドレスを指定します。

例

次のコマンドは、1 つの MAC アドレスの RMON ホスト統計を表示します。

```
display rmon host_data host_address 00:00:1a:24:00:01
```

関連コマンド

CLEAR RMON コマンド

ENABLE/DISABLE RMON コマンド

DISPLAY RMON LOG_DATA

このコマンドを使用すると、RMON イベント・ログの項目を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon log_data

```
▶—display rmon log_data—index—▶  
                          └─all─┘
```

index RMON イベント・テーブルのインデックス番号を指定します。 *index* は、1 以上の番号です。

all RMON イベント・ログ全体を表示します。

例

次のコマンドは、RMON イベント・ログのすべての項目を表示します。

```
display rmon log_data all
```

関連コマンド

CLEAR RMON コマンド

ENABLE RMON

SET RMON コマンド

DISPLAY RMON MATRIX_DATA

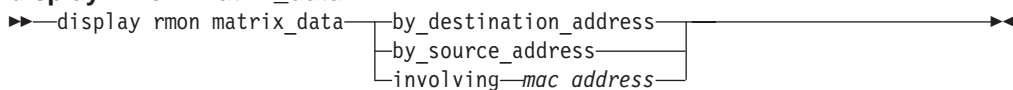
このコマンドを使用すると、RMON マトリックス・グループのデータを表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド

- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon matrix_data



by_destination_address

マトリックス項目を、宛先 MAC アドレスの値の順にリストします。

by_source_address

マトリックス項目を、ソース MAC アドレスの値の順にリストします。

involving

指定する MAC アドレスをソース・アドレスまたは宛先アドレスのいずれかとして含んでいるマトリックス項目を、すべてリストします。

mac_address

6 つの 16 進バイトをコロンで区切って並べたアドレスを指定します。

例

次のコマンドは、RMON マトリックス項目を、宛先 MAC アドレスの値の順にリストします。

```
display rmon matrix_data by_destination_address
```

関連コマンド

ENABLE/DISABLE RMON MATRIX

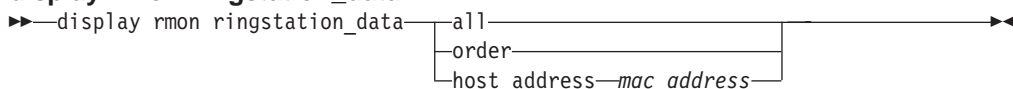
DISPLAY RMON RINGSTATION_DATA

このコマンドを使用すると、RMON トークンリング・リング・ステーション・グループのデータを表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon ringstation_data



all すべてのリング・ステーションをリストします。

order リング・ステーションをトークン・パッシングの順にリストします。

host_address

指定する MAC アドレスのリング・ステーション・データをリストします。

mac_address

6 つの 16 進バイトをコロンで区切って並べたアドレスを指定します。

例

次のコマンドは、1 つの MAC アドレスの RMON トークンリング・リング・ステーション統計を表示します。

```
display rmon ringstation_data host_address 00:00:00:10:40:AC
```

関連コマンド

```
CLEAR RMON COUNTER  
ENABLE RMON RINGSTATION
```

DISPLAY RMON STATISTICS_DATA

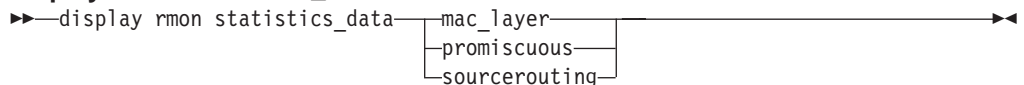
このコマンドを使用すると、RMON 統計グループのデータを表示することができます。

ソース・ルーティング統計が正確であるためには、8239 モデル 1 がモニター中のリングのセグメントを認識している必要があります。詳細については、セットアップと使用者の手引きの「RMON をサポートするためのモデル 1 の構成」の項を参照してください。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon statistics_data



mac_layer

MAC レイヤーのグループ統計を表示します。

promiscuous

その他のグループ統計を表示します。

sourcerouting

ソース・ルーティング・グループ統計を表示します。

例

次のコマンドは、ソース・ルーティング・グループ統計を表示します。

```
display rmon statistics_data sourcerouting
```

関連コマンド

```
CLEAR RMON
```

DISPLAY RMON TOPN_HOSTS_DATA

このコマンドを使用すると、RMON ホスト・トップ N グループの項目を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display rmon topn_hosts_data

```
▶▶—display rmon topn_hosts_data—control_index—rank_index—▶▶
                                     └──all──┘
```

control_index

ホスト・トップ N グループ制御テーブルの項目を指定します。 *control_index* は、制御テーブルの項目です。 DISPLAY RMON CONTROL を使用して、制御テーブルの項目を表示することができます。

rank_index

データを表示したいホストのランクを指定します。 *rank_index* は 1 から 10 までの値です。

all すべてのホストを指定します。

例

次のコマンドは、10 のホストすべての制御項目 3 のデータを表示します。

```
display rmon topn_hosts_data 3 all
```

関連コマンド

```
ENABLE RMON TOPN_HOSTS
```

```
SET RMON TOPN_HOSTS
```

DISPLAY SCHEDULE

このコマンドを使用すると、すべてのスケジュールまたは特定のスケジュールのスケジュール情報を表示することができます。スケジュールは、スクリプトの実行時期を指定するために使用されます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

DISPLAY SECURITY INTRUDER_LIST

このコマンドを使用すると、最新の 20 のセキュリティー侵害に関する情報を表示することができます。侵害者リストは、すべてのハブで共通です (すべてのハブで同じ侵害者リストが表示されます)。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

display security intruder_list

▶▶—display security intruder_list—▶▶

例

次のコマンドは、侵害者のリストを表示します。

```
display security intruder_list
```

関連コマンド

```
CLEAR SECURITY INTRUDER_LIST  
SET SECURITY コマンド
```

DISPLAY SECURITY PORT

このコマンドを使用すると、特定のポートまたは複数のポートのセキュリティー・モード、MAC アドレス、および侵害行為を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

display security port

▶▶—display security port—hub.port—▶▶
 |
 all

hub.port

この操作の対象となるポートを指定します。hub は 1 から 8 までの値、port は 1 から 32 までの値、または **all** です。

all スタック内のすべてのハブのすべてのポートを指定します。

例

次のコマンドは、ハブ 3 のすべてのポートについて、セキュリティー情報を表示します。

```
display security port 3.all
```

関連コマンド

DISPLAY STACK

このコマンドを使用すると、スタック内の各ハブのハブ ID、モデル番号、コード・バージョン、ベース MAC アドレス、システムアップ時間、コード・ロード状況を表示することができます。

このコマンドは、どのハブが接続されているかを判別するために使用します。スタック・ケーブルが接続されたり切り離されたりすると、ハブは一時的に接続を失うことがあります。通常、ハブが切断状態を検出するまで約 20 秒かかります。この過渡状態の間に DISPLAY STACK が発行されると、次のエラーが発生することがあります。

- コマンドが 10 - 15 秒間ハングします。これは、ハブ間の TCP/IP 接続が準備できていないことを表します。
- “System Up Time” の欄に *NO SERVER* が表示されます。これは、ハブはスタック内にありますが、通信の準備ができていないことを表します。
- コマンドが 10 - 15 秒間ハングし、その後失敗に終わります。これは、ターゲットのハブがスタックを離れたことを表します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

display stack

▶—display stack—▶

例

次のコマンドは、このスタックに関する主要な情報を表示することができます。

```
display stack
```

関連コマンド

DISPLAY HUB

DISPLAY TERMINAL

このコマンドを使用すると、EIA-232 ポートおよび TELNET セッションの端末パラメーター値を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display terminal

```
▶▶—display terminal—
```

例

次のコマンドは、EIA-232 ポートの端末設定値を表示します。

```
display terminal
```

関連コマンド

SET TERMINAL コマンド

DISPLAY TR_SURROGATE CRS_STATION

このコマンドを使用すると、CRS で得られたステーション情報を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surr crs_station

```
▶▶—display tr_surrogate crs_station—  
    |all|  
    |mac_address—mac_address|
```

all CRS がモニターしているすべてのステーションの CRS 情報を表示します。

mac_address *mac_address*

指定する MAC アドレスの CRS 情報を表示します。

例

次のコマンドは、MAC アドレス 08:00:8e:d0:00:c9 の CRS ステーション情報を表示します。

```
display tr_surrogate crs_station mac_address 08:00:8e:d0:00:c9
```

関連コマンド

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE CRS_TRAPS

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS CRS_ADMIN

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN

SET TR_SURROGATE CRS_STATION

DISPLAY TR_SURROGATE CRS_STATUS

このコマンドを使用すると、CRS 状況情報を表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surrogate crs_status

▶▶—display tr_surrogate crs_status—▶▶

例

次のコマンドは、CRS 状況を表示します。

display tr_surrogate crs_status

関連コマンド

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE CRS_TRAPS
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS CRS_ADMIN
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN

DISPLAY TR_SURROGATE REM_ERROR_MAC_FRAME

このコマンドを使用すると、最新に受信したエラー MAC フレームに関する情報を表示することができます。

REM エラー MAC フレーム・テーブルはトラップの構築に使用された情報を表示し、転送 MAC フレーム・エラー・トラップの隣接局通知部分およびアクティブ・モニター・エラー部分を記述しています。REM_TRAPS が使用可能になっていると、エージェントがトラップを構築し、それを trap_community テーブルに指定されている適切な IP アドレスに転送します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surrogate rem_error_mac_frame

▶▶—display tr_surrogate rem_error_mac_frame—▶▶

例

次のコマンドは、最新に受信した REM エラー MAC フレームを表示します。

display tr_surrogate rem_error_mac_frame

インを記述します。このコマンドを使用すると、最後に検出したリングのビーコン状態に関する情報を表示できます。トラップは、REM_TRAPS が使用可能になっている場合にのみ発行されます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surrogate rem_last_beacon

▶▶—display tr_surrogate rem_last_beacon—▶▶

例

次のコマンドは、最後に受信したビーコンを表示します。

```
display tr_surrogate rem_last_beacon
```

関連コマンド

```
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE REM_STATUS REM_TRAPS
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS REM_ADMIN
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
SET TRAP_COMMUNITY TR_SURROGATE
```

DISPLAY TR_SURROGATE REM_LAST_SOFT_ERROR

このコマンドを使用すると、REM 最新受信ソフト・エラー・テーブルの内容を表示することができます。

REM 最新受信ソフト・エラー・テーブルは、おもに SNMP ネットワーク管理者に情報を提供するためのものです。情報は特定のトラップを構築するために作られているため、REM がソフト・エラー・レポート MAC フレームを受信した時点でのステーションの状態だけが入っています。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surrogate rem_last_soft_error

▶▶—display tr_surrogate rem_last_soft_error—▶▶

例

次のコマンドは、REM の最新のソフト・エラー受信データを表示します。

```
display tr_surrogate rem_last_soft_error
```

関連コマンド

```
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS REM_ADMIN  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
```

DISPLAY TR_SURROGATE REM_NONISO_THRESHOLD_EXCD

このコマンドを使用すると、非分離エラーについて最後に検出した限界値超過状態に関する情報を表示します。

REM 非分離限界値超過テーブルは、トラップの構築に使用された情報を表示し、超過したソフト・エラー・カウンターを記述しています。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surrogate rem_noniso_threshold_excd

```
▶▶—display tr_surrogate rem_noniso_threshold_excd————▶▶
```

例

次のコマンドは、最新に検出された限界値超過状態に関する情報を表示します。

```
display tr_surrogate rem_noniso_threshold_excd
```

関連コマンド

```
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE REM_STATUS  
NONISO_THRESHOLD_EXCD_TRAPS  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE REM_STATUS REM_TRAPS  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS REM_ADMIN  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN  
SET TRAP_COMMUNITY TR_SURROGATE
```

DISPLAY TR_SURROGATE REM_STATUS

このコマンドを使用すると、どの REM フラグが使用可能かを表示することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surrogate rem_status

▶▶—display tr_surrogate rem_status—▶▶

例

次のコマンドは、現行の REM 状況テーブルを表示します。

```
display tr_surrogate rem_status
```

関連コマンド

```
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE REM_STATUS  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS REM_ADMIN  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
```

DISPLAY TR_SURROGATE REM_TOTAL_NONISO_SOFT_ERROR

このコマンドを使用すると、REM 非分離ソフト・エラー・データのカウンタを表示することができます。

REM ソフト・エラー統計テーブルは、非分離ソフト・エラー・カウンタの累計カウンタを提供します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

```
display tr_surrogate rem_total_noniso_soft_error
```

▶▶—display tr_surrogate rem_total_noniso_soft_error—▶▶

例

次のコマンドは、REM ソフト・エラー・データを表示します。

```
display tr_surrogate rem_total_noniso_soft_error
```

関連コマンド

```
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS REM_ADMIN  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
```

DISPLAY TR_SURROGATE RPS_STATUS

このコマンドを使用すると、RPS 状況を表示することができます。この状況には、RPS_TRAPS の構成値、およびネットワークに挿入する最後のステーションに関する情報が入っています。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド

- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surrogate rps_status

▶▶—display tr_surrogate rps_status—▶▶

例

次のコマンドは、RPS 状況グループを表示します。

display tr_surrogate rps_status

関連コマンド

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE RPS_TRAPS
 ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS RPS_ADMIN
 ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
 SET TRAP_COMMUNITY TR_SURROGATE

DISPLAY TR_SURROGATE SURR_STATUS

このコマンドを使用すると、8239 に関する以下の情報を入手することができます。

- サロゲート機能および CRS、REM、RPS グループの、管理状態および動作状態
- サロゲート・エージェントの MAC アドレス
- リング・セグメント番号
- リング使用状況

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display tr_surrogate surr_status

▶▶—display tr_surrogate surr_status—▶▶

例

次のコマンドは、現行のサロゲート状況を表示します。

display tr_surrogate surr_status

関連コマンド

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS
 SET TR_SURROGATE

DISPLAY TRAP_LOG

このコマンドを使用すると、トラップ・ログの情報を表示することができます。

トラップ・ログには、8239 が受信した最近のトラップ・メッセージが入っています。8239 は FIFO (先入れ先出し法) でトラップを保管し、トラップ・ログがいっぱいになると、最も古いトラップを削除します。トラップ・ログには最大 64 個の項目が入ります。

トラップ・ログには、8239 が生成するよう構成されているトラップだけが入っています。使用不可にできないトラップ (たとえば、HUB DOWN TRAP) は、自動的にトラップ・ログに入ります。最新のトラップが最初に表示されます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display trap_log

▶▶—display trap_log—▶▶

例

次のコマンドは、トラップ・ログを表示します。

```
display trap_log
```

関連コマンド

```
CLEAR TRAP_LOG  
DISPLAY TRAP_SETTINGS  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE CRS_TRAPS  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE REM_STATUS REM_TRAPS  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE RPS_TRAPS  
ENABLE/DISABLE TRAP_SETTING  
SET SECURITY_PORT ACTION_ON_INTRUSION
```

DISPLAY TRAP_SETTINGS

このコマンドを使用すると、現行のトラップ設定値をリストすることができます。トラップ設定値は、端末インターフェースに表示されるトラップ、およびトラップ・コミュニティー・テーブルで定義されているトラップ受信側に送られるトラップを指定しています。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- ユーザーが発行できるコンソール表示を除き、管理者専用コマンド

- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

display trap_settings

▶▶—display trap_settings—▶▶

例

次のコマンドは、現行のトラップ設定値を表示します。

```
display trap_settings
```

関連コマンド

```
DISPLAY COMMUNITY  
ENABLE/DISABLE TRAP_SETTING  
SET TRAP_COMMUNITY
```

DISPLAY WRAP_POINTS

このコマンドを使用すると、ハブ内の各種の折り返し点の状況を表示することができます。これらの折り返し点は、ユーザー・データおよびスタック制御データのスタック内での流れに影響を与えます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

display wrap_points

▶▶—display wrap_points—▶▶

hub_id
[all]

hub_id ハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

all すべてのハブを指定します。

例

次のコマンドは、ハブ 1 の折り返し点情報を表示します。

```
display wrap_points 1
```

関連コマンド

```
WRAP/UNWRAP
```


関連コマンド

CLEAR GROUP NAME
CLEAR GROUP PORT
DISPLAY GROUP
SET GROUP NAME
SET GROUP PORT

ENABLE/DISABLE PORT

このコマンドを使用すると、ポート内の特定のモードを使用可能または使用不可にすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

enable|disable port



all この操作を、このスタック内のすべてのハブのすべてのポートに対して行うよう指定します。

hub.all 指定するハブのすべてのポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値です。

hub.port

この操作の対象となるポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値、*port* は 1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、ハブ 4 のポート 2 へのステーションの挿入を禁止します。

```
disable port mode 4.2
```

関連コマンド

DISPLAY HUB
DISPLAY PORT

ENABLE/DISABLE PORT_SETTING

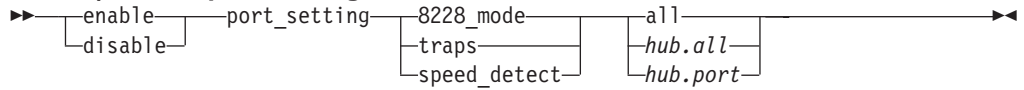
このコマンドを使用すると、ポート内の特定の設定を使用可能または使用不可にすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド

- 管理者またはユーザーのコマンド

enable|disable port_setting



8228_mode

指定するポートの、IBM 8228 上の RI ポートへの接続を定義します。8228_mode 装置は、このモードを使用可能にする前にポートに接続しておく必要があります。前もって接続されていないと、ネットワークの混乱が発生することがあります。一度に 1 つのポートだけを指定するようにしてください。enable はこの機能をオンにし、disable はこの機能をオフにします。省略時の値は、使用不可です。

traps 特定のポートのポート・アップ/ダウン・トラップ生成を制御します。このコマンドは、ENABLE TRAP_SETTING PORT_UP_DOWN と組み合わせて使用してください。2 つのコマンドをどの順序で発行してもかまいません。enable はこの機能をオンにし、disable はこの機能をオフにします。省略時の値は使用可能です。

speed_detect

ハブがポートで速度検出を行うかどうかを制御します。速度検出機能の詳細については、SET HUB SPEED_THRESHOLD を参照してください。enable はこの機能をオンにし、disable はこの機能をオフにします。省略時の値は使用可能です。

all この操作を、このスタック内のすべてのハブのすべてのポートに対して行うよう指定します。

hub.all 指定するハブのすべてのポートを指定します。hub は 1 から 8 までの値です。

hub.port

この操作の対象となるポートを指定します。hub は 1 から 8 までの値、port は 1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、8239 が指定されたポートの挿入の前に有効なリング速度を検査しないよう設定します。

```
disable port_setting speed_detect 4.2
```

関連コマンド

```
DISPLAY HUB
DISPLAY PORT
```

ENABLE/DISABLE PURGE_ON_INSERT

このコマンドを使用すると、ポート挿入時のページを使用可能または使用不可にすることができます。省略時の値は使用可能です。セグメントにリング・パラメーター・サーバーを使用可能にした 8239 モデル 1 がある場合、PURGE_ON_INSERT を使用不可にすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

enable|disable purge_on_insert

```
▶▶ ┌──enable──┐ ───purge_on_insert──hub_id──▶▶  
    └──disable┘
```

hub_id ハブ ID を指定します。*hub_id* は 1 から 8 までの値、または all です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 3 の *purge_on_insert* を使用可能にします。

```
enable purge_on_insert 3
```

関連コマンド

```
DISPLAY HUB  
DISPLAY TR_SURROGATE  
SET TR_SURROGATE SEGMENT_NUMBER  
SET TR_SURROGATE SURR_STATUS RPS_ADMIN  
SET TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
```

ENABLE/DISABLE RING_IO

このコマンドを使用すると、スタック・リングに対してリングインおよびリングアウト・ポートをオープンすることができます。

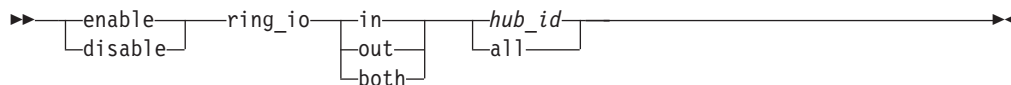
ENABLE は RI/RO ポートをスタック・リングに接続します。DISABLE は RI/RO ポートをスタック・リングから分離します。省略時の設定は使用不可です。

このコマンドは、WRAP/UNWRAP RING_IO と同じ機能を果たします。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

enable|disable ring_io



in この操作に、リングインを指定します。

out この操作に、リングアウトを指定します。

both この操作に、リングインとリングアウトの両方を指定します。

hub_id この操作を行うハブ ID を指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

all スタック内のすべての 8239 モデル 1 にこの操作を行うよう、指定します。

例

次のコマンドは、ハブ 1 の ring_in および ring_out の折り返しを解除します。

```
enable ring_io both 1
```

関連コマンド

```
DISPLAY RING_IO
```

```
WRAP/UNWRAP RING_IO
```

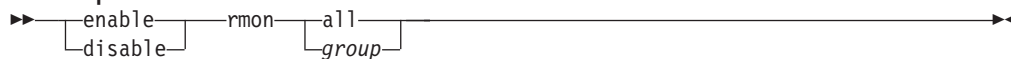
ENABLE/DISABLE RMON

このコマンドを使用すると、特定の RMON グループまたはすべての RMON のモニターを使用可能または使用不可にすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

enable|disable rmon



all すべての RMON モニターを使用可能または使用不可にします。

group 使用可能または使用不可にする RMON グループを指定します。*group* には、以下のいずれかの値を指定することができます。

- alarm
- event
- history
- host
- matrix
- ringstation
- statistics_mac_layer

- statistics_promiscuous
- statistics_sourcerouting
- topN_hosts

例

次のコマンドは、ENABLE RMON ALARM が発行されるまで、すべての RMON アラーム機能を使用不可にします。

disable rmon alarm

関連コマンド

CLEAR RMON コマンド
 DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE
 DISPLAY RMON コマンド
 SET RMON コマンド

ENABLE/DISABLE SCHEDULE

このコマンドを使用すると、特定のスケジュールを使用可能または使用不可にすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

enable|disable schedule



index 使用可能または使用不可にするスケジュールを指定します。*index* は 1 から 20 までの番号です。

all すべてのスケジュールを使用可能または使用不可にします。

例

次のコマンドは、ローカル 8239 のすべてのスケジュールを使用可能にします。

enable schedule all

関連コマンド

DISPLAY SCHEDULE
 SET SCHEDULE

ENABLE/DISABLE SECURITY_PORT

このコマンドを使用すると、特定のポートまたは複数のポートのセキュリティー機能を使用可能または使用不可にすることができます。特定のポートにこの機能を使用可能にしておく、そのポートの保護 MAC アドレス・テーブルに入っていない MAC アドレスが検出された場合に、セキュリティー侵害が発生します。保護 MAC アドレス・テーブルの詳細については、96ページの『SET SECURITY_PORT ACTION_ON_INTRUSION』を参照してください。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

enable|disable security_port

▶ enable|disable security_port hub.port all ▶

hub この操作の対象となるハブを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値、またはスタック内のすべてのハブを指定する場合は **all** です。

port この操作の対象となるポートを指定します。*port* は 1 から 32 までの値、または **all** です。

all すべてのハブのすべてのポートを指定します。

例

次のコマンドは、ハブ 1 のポート 3 にセキュリティーを使用可能にするよう、指定します。

```
enable security_port 1.3
```

関連コマンド

```
DISPLAY SECURITY  
SAVE
```

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE CRS_TRAPS

このコマンドを使用すると、CRS のトラップ生成オプションを使用可能または使用不可にすることができます。使用可能にした場合、このコマンドは CRS 機能に対して NAUN 構成変更トラップをレポートするよう指示します。省略時の値は使用可能です。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

enable|disable tr_surrogate crs_traps

▶▶

enable	tr_surrogate crs_traps	▶▶
disable		

例

次のコマンドは、CRS トラップを使用可能にします。

```
enable tr_surrogate crs_traps
```

関連コマンド

```
DISPLAY COMMUNITY
DISPLAY TR_SURROGATE CRS_STATUS
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS CRS_ADMIN
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
SET TRAP_COMMUNITY TR_SURROGATE
```

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE REM_STATUS

このコマンドを使用すると、ハブの REM 機能を使用可能または使用不可にすることができます。

注: リング集中のフラグ (接頭部が **ring** のフラグ) を使用可能にすると、過度のソフト・エラー・トラップが生成されることがあります。これらのフラグを使用可能にするのは、ソフト・エラー MAC フレームの関連するカウンターの値が 0 より大きくなるたびに通知が必要な場合だけにしてください。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

enable|disable tr_surrogate rem_status

▶▶

enable	tr_surrogate rem_status	option	▶▶
disable			

option は、次のいずれかです。

all_flags

すべての項目にこの操作を指定します。

rem_traps

REM がトラップを生成するかどうかを決定します。REM トラップを生成するためには、このフラグを使用可能にしておく必要があります。省略時の値は使用可能です。

weight_excded_traps

REM がウェイト超過トラップを生成するかどうかを決定します。これらのト

ラップは、特定の障害ドメインでソフト・エラー限界値を超過したことを表します。省略時の値は、使用不可です。

preweight_excded_traps

REM が事前ウェイト超過トラップを生成するかどうかを決定します。これらのトラップは、ステーションがソフト・エラー限界値超過に近づいていることを表します。省略時の値は、使用不可です。

rcvr_congestion_traps

REM が受信側輻輳（ふくそう）トラップを生成するかどうかを決定します。これらのトラップは、ステーションの受信バッファが着信トラフィックによって過負荷になっていることを表します。省略時の値は、使用不可です。

noniso_threshold_excd_traps

REM が非分離限界値超過トラップを生成するかどうかを決定します。これらのトラップは、モニターしている非分離エラー・カウンターの 1 つがその限界値を超えたことを表します。省略時の値は、使用不可です。

forward_frames_traps

REM が、隣接局通知レポート MAC フレームおよびモニター・エラー・レポート MAC フレームの情報をセグメントの LAN マネージャーに転送するかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_line_error_data

REM が、回線エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_internal_error_data

REM が、内部エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_burst_error

REM が、バースト・エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_ac_error_data

REM が、A/C エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_abortxmt_error_data

REM が、送信打ち切りエラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_lostframes_error_data

REM が、フレーム脱落エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_rcvrcngst_error_data

REM が、受信側輻輳 (ふくそう) エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_framecopy_error_data

REM が、フレーム・コピー・エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_frequency_error_data

REM が、頻度エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

ring_token_error_data

REM が、トークン・エラー・データをリング集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_line_error_data

REM が、回線エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_internal_error_data

REM が、内部エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_burst_error_data

REM が、バースト・エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_ac_error_data

REM が、A/C エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_abortxmt_error_data

REM が、送信打ち切りエラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_lostframes_error_data

REM が、フレーム脱落エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_rcvrcngst_error_data

REM が、受信局輻輳 (ふくそう) エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_framecopy_error_data

REM が、フレーム・コピー・エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_frequency_error_data

REM が、頻度エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

auto_token_error_data

REM が、トークン・エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレーム・トラップに入れるかどうかを決定します。省略時の値は、使用不可です。

reset すべての REM オプションをリセットします。

例

次のコマンドは、ハブ 1 でトークン・エラー・データを自動集中 REM ソフト・エラー転送 MAC フレームに入れます。

```
enable tr_surrogate rem_status auto_token_error_data
```

関連コマンド

```
DISPLAY TR_SURROGATE REM_STATUS
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS REM_ADMIN
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
SET TRAP_COMMUNITY TR_SURROGATE
```

ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE RPS_TRAPS

このコマンドを使用すると、RPS のトラップ生成オプションを使用可能または使用不可にすることができます。使用可能にした場合、このコマンドは RPS 機能に対して、ステーションがリングに挿入された場合にレポートするよう指示します。省略時の値は使用可能です。

このコマンドは SET MANAGEMENT_INTERFACE RPS_TRAPS と同じ機能を果たしますが、SET MANAGEMENT_INTERFACE コマンドはローカル 8239 に制約されていない点だけが異なります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

enable|disable tr_surrogate rps_traps

```
▶▶ enable tr_surrogate rps_traps ▶▶
   └─ disable ─┘
```

例

次のコマンドは、RPS トラップを使用可能にします。

```
enable tr_surrogate rps_traps
```

関連コマンド

```
DISPLAY TR_SURROGATE RPS_STATUS
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS RPS_ADMIN
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
SET MANAGEMENT_INTERFACE RPS_TRAPS ENABLE/DISABLE
```

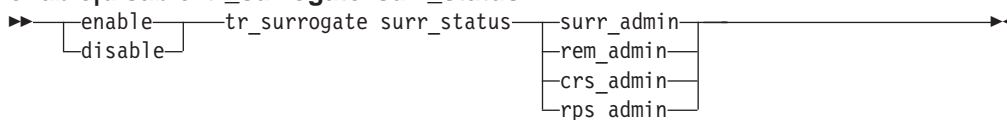
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS

このコマンドを使用すると、ハブのサロゲート機能、または REM、CRS、RPS 機能を、使用可能または使用不可にすることができます。このコマンドは SET MANAGEMENT_INTERFACE SURROGATE_MODE と同じ機能を果たしますが、SET MANAGEMENT_INTERFACE はローカル 8239 に制約されていない点だけが異なります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

enable|disable tr_surrogate surr_status



surr_admin

ローカル・ハブのトークンリング・サロゲート機能 (REM、CRS、および RPS) を使用可能または使用不可にします。サロゲート情報を使用しない場合には、このパラメーターを使用不可にしてシステム資源を節約するようにしてください。省略時の値は、使用不可です。

rem_admin

REM 機能を使用可能または使用不可にします。REM を活動状態にするには、**surr_admin** も使用可能にしなければなりません。省略時の値は、使用不可です。

crs_admin

CRS 機能を使用可能または使用不可にします。CRS を活動状態にするには、**surr_admin** も使用可能にしなければなりません。省略時の値は、使用不可です。

rps_admin

RPS を使用可能または使用不可にします。RPS を活動状態にするためには、

surr_admin も使用可能にし、サロゲート・セグメント番号がゼロ以外の値でなければなりません。省略時の値は、使用不可です。

例

次のコマンドは、REM を使用可能にします。

```
enable tr_surrogate surr_status rem_admin
```

関連コマンド

```
DISPLAY TR_SURROGATE SURR_STATUS  
SET MANAGEMENT_INTERFACE SURROGATE_GROUP ENABLE/DISABLE  
SET TR_SURROGATE SEGMENT_NUMBER
```

ENABLE/DISABLE TRAP_SETTING

このコマンドを使用すると、一定のイベントが発生した場合に 8239 が処置をとるよう、構成することができます。処置には、次のものがあります。

- 指定されたトラップ受信側にトラップ (アラート) を送信します (8239 モデル 1 のみ)。

ハブがトラップ送信先を認識できるよう、コミュニティー・テーブルを用いてトラップ受信側を構成しなければなりません。SET TRAP_COMMUNITY を使用してください。

- ローカル接続された端末の表示装置にトラップ・メッセージを表示します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- ユーザーが発行できるコンソール表示を除き、管理者専用コマンド

enable|disable trap_setting

```
▶▶ enable|disable trap_setting parameters ▶▶
```

parameters は、次のいずれかです。

authentication

認証トラップを使用可能または使用不可にします。SNMP 管理者が 8239 モデル 1 の読み取りまたは書き込みを試みた場合に、そのユーザーのコミュニティー名が操作に対して有効でないと、8239 モデル 1 は認証トラップを発行します。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 でのみ使用することができます。

console_display

ローカル端末へのトラップ表示を使用可能または使用不可にします。コンソール表示が使用不可になっていても、一定のトラップは画面に表示されます。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 で使用することができます。

control_io_status_up_down

コントロール・インまたはコントロール・アウト接続が折り返しまたは折り返し解除になったことを示すトラップを、使用可能または使用不可にします。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 で使用することができます。

data_io_status_up_down

データ・インまたはデータ・アウト接続が折り返しまたは折り返し解除になったことを示すトラップを、使用可能または使用不可にします。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 で使用することができます。

multiple_users

EIA-232 ポートまたは Telnet セッションのいずれかを介して複数のユーザーがログインしたことを示すトラップを、使用可能または使用不可にします。最大 5 つの Telnet セッションおよび 1 つの EIA-232 セッションを、同時に活動状態にすることができます。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 でのみ使用することができます。

port_up_down

port_up_down トラップを使用可能または使用不可にします。ハブは、ポートが作動開始 (アップ) または作動停止 (ダウン) すると、port_up_down トラップを送信します。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 で使用することができます。

ring_io_status_up_down

リングインまたはリングアウト接続が折り返しまたは折り返し解除になったことを示すトラップを、使用可能または使用不可にします。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 でのみ使用することができます。

rmon RMON トラップをコンソールに表示するよう指定します。省略時の設定は使用不可です。このパラメーターは、8239 モデル 1 でのみ使用することができます。

注: この trap_setting とは関係なく、RMON 2 トラップ・テーブルに有効なコミュニティー・テーブル項目が存在すれば、RMON トラップは常にトラップ受信側に送信されます。

script スケジュールされたスクリプトが実行された場合のスクリプト・メッセージの送信を、使用可能または使用不可にします。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 でのみ使用することができます。

security_intruder

ポートセ・キュリティー侵害トラップを使用可能または使用不可にします。省略時の設定は使用可能です。このパラメーターは、8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 で使用することができます。

例

次のコマンドは、スケジュールされたスクリプトが実行された場合にトラップを発行しないよう、ハブに指示します。

```
disable trap_setting script
```


例

次のコマンドは、ポートのリングへの挿入または挿入解除が発生した場合に、ハブがトラップを送信しないよう指定します。

```
disable trap_setting port_up_down
```

関連コマンド

```
DISPLAY COMMUNITY
DISPLAY TRAP_SETTINGS
SET TRAP_COMMUNITY
```

LOAD

このコマンドを使用すると、動作コード、構成ファイル、またはスクリプト・ファイルを 8239 に転送することができます。ファイルは、TFTP または XMODEM を用いて転送できます。XMODEM ファイル転送は、EIA-232 ポートからのみ開始することができます。TFTP が要求されると、8239 は TFTP ファイル名および TFTP サーバー・アドレスの入力を求めるプロンプトを出します。

LOAD OPERATIONAL_CODE を 8239 モデル 2 に対して発行すると、動作コードはスタック内の モデル 2 のみにロードされます。それに対してコマンドを 8239 モデル 1 に対して発行すると、モデルとは無関係に、スタック内のすべてのハブが更新されます。動作コードは FLASH メモリーに保管されます。新しい動作コードを実行するには、8239 をリセットする必要があります。

モデル 1 と モデル 2 の動作コード・ファイルは異なります。ファイル名の規則は *MmRrVv.opr* です。ここで、

m= モデル 1 の場合は 1

モデル 2 の場合は 2

r = リリース番号

v = バージョン番号

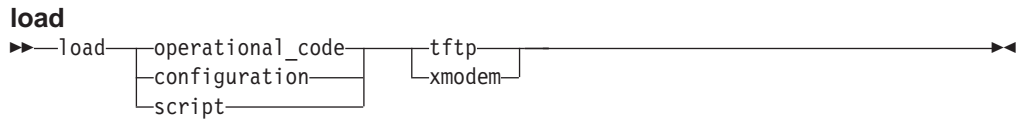
モデル 1 の動作コード・ファイルには、モデル 1 と モデル 2 の両方の動作コードが入っています。

構成ファイルをロードすると、ファイル転送が完了した時点でただちに構成コマンドが実行されます。

スクリプト・ファイルをロードすると、コマンドは DRAM に保管されます。コマンドを実行するには、スクリプトを起動しなければなりません。スクリプトを FLASH メモリーに保管するためには、SAVE を発行しなければなりません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド



operational_code

動作コードをダウンロードするよう指定します。

configuration

構成ファイルをロードするよう指定します。

script スクリプト・ファイルをロードするよう指定します。

tftp TFTP を使用するロードを指定します。

xmodem

XMODEM を使用するロードを指定します。

例

次のコマンドを 8239 モデル 1 で発行すると、スタック内のすべての 8239 の動作コードが、TFTP を用いてロードされます。

```
load operational_code tftp
```

関連コマンド

```

REPLICATE OPERATIONAL_CODE
RESET_HUB
RETRIEVE
SAVE

```

LOGOUT

このコマンドを使用すると、EIA-232 ポートまたは Telnet セッションからログアウトすることができます。

EIA-232 セッションからログアウトすると、新しいログイン・プロンプトが表示されます。モデムがある場合、モデムはハングアップしません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

logout



例

次のコマンドでは、ローカル・セッションからログアウトします。

PING

このコマンドを使用すると、装置がネットワークに到達できるかどうかを検査することができます。

PING は 10 のインターネット制御メッセージ・プロトコル (ICMP) 要求パケットを、指定された装置に送信します。装置が活動状態の場合、受信する各要求パケットに応答します。装置の応答が要求パケットの 100 パーセントに満たない場合には、ネットワークでパケットが脱落しています。

リモート装置の PING で障害がある場合には、次の点を確認してください。

- 装置が同じネットワーク (セグメント) にあるか、またはそのセグメントにブリッジまたはルートされるか。
- 管理インターフェースの `administrative_mode` が使用可能で、アダプター状況が OPENED になっているか。
- ハブの IP 情報が構成されているか。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

ping

▶▶ ping *ip_address* ◀◀

ip_address

テストする装置の IP アドレスを指定します。*ip_address* はピリオドで区切った 4 個の 10 進バイト (例: 192.122.19.4) です。

例

次のコマンドは、10 個の PING 要求を IP アドレス 155.104.14.23 に送信します。

ping 155.104.14.23

関連コマンド

DISPLAY IP
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE
SET IP
SET MANAGEMENT_INTERFACE ADMINISTRATIVE_MODE

REPLICATE CLOCK

このコマンドを使用すると、すべての 8239 モデル 1 のクロックを、ローカル 8239 で示されているクロック時間にセットすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

replicate clock

▶▶—replicate clock—▶▶

例

次のコマンドは、スタック内のすべての 8239 モデル 1 のクロックを、ローカル・ハブで示されている時刻にセットします。

replicate clock

関連コマンド

DISPLAY CLOCK

SET CLOCK

REPLICATE LOGIN

このコマンドを使用すると、ローカル・ハブからスタック内の他の全 8239 (8239 モデル 1 および 8239 モデル 2) に、ログイン情報をコピーすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

replicate login

▶▶—replicate login—▶▶

例:

replicate login

関連コマンド

CLEAR LOGIN

DISPLAY LOGIN

SET LOGIN

REPLICATE_OPERATIONAL_CODE

このコマンドを使用すると、ローカル・ハブからスタック内の他の全 8239 (8239 モデル 1 および 8239 モデル 2) に、動作コードをコピーすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

replicate_operational_code

▶—replicate_operational_code—▶

例:

```
replicate_operational_code
```

関連コマンド

LOAD_OPERATIONAL_CODE

RESET_HUB

このコマンドを使用すると、1つのスタックの1つのハブまたはスタック全体を、リセットすることができます。FLASH メモリーに保管されていない構成変更は失われます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

reset_hub

▶—reset_hub—
└─all─┐
└─hub_id─┘

all スタック全体をリセットします。

hub_id この操作を行うハブを指定します。**hub_id** は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ ID 6 の 8239 をリセットします。

```
reset_hub 6
```

関連コマンド

SAVE

RESTORE_TO_FACTORY_DEFAULT

このコマンドを使用すると、FLASH メモリー内のハブ構成を省略時の設定に復元することができます。スタック内のすべてのハブが、省略時の設定に戻ります。省略時の設定はハブがリセットされた後のみ有効になるため、スタックをリセットする前に SAVE コマンドを発行 **してはなりません**。リセットの前に保管すると、ハブは現行の構成でリブートします。パラメーターおよび省略時の設置値のリストについては、セットアップおよび使用者の手引きの「構成パラメーター」の項を参照してください。

重要: このコマンドを実行すると、ハブ ID をはじめとしたすべてのカスタマー構成値が失われます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

restore_to_factory_default

▶—restore_to_factory_default—▶

例

次のコマンドは、構成を省略時の設置に復元します。

```
restore_to_factory_default
```

RETRIEVE

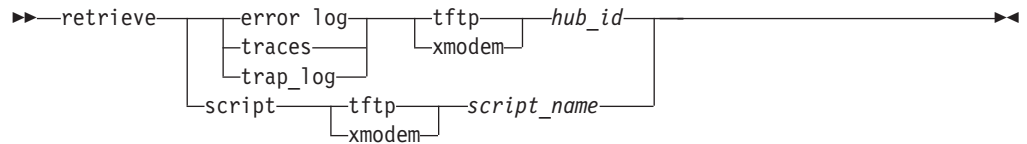
このコマンドを使用すると、スクリプト・ファイル、エラー・ログ、トラップ・ログ、およびトレースを 8239 から入手することができます。スクリプト・ファイルには、スクリプトの実行時に実行される端末インターフェース・コマンドが入っています。エラー・ログ (バイナリー・ファイル) およびトレース (ASCII ファイル) は、サービス技術員がフィールドの問題をデバッグする場合に使用します。トラップ・ログには、8239 が受信した最近のトラップ・メッセージが入っています。トラップ情報の詳細については、45ページの『DISPLAY TRAP_LOG』を参照してください。

TFTP を選択すると、コマンドは IP アドレスなどの情報の入力を求めるプロンプトを出します。XMODEM ファイル転送は、EIA-232 ポートに接続されている端末からのみ開始することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

retrieve



error_log

エラー・ログを検索するよう指定します。

traces トレース・レコードを検索するよう指定します。トレース情報は、ファイル名を求めるプロンプトが出たときに TFTP を選択して **Enter** を押すことによって、端末インターフェース上に表示することができます。

trap_log

トラップ・ログを検索するよう指定します。

script スクリプトを検索するよう指定します。

tftp TFTP を使用して検索するよう指定します。

xmodem

XMODEM を使用した検索を指定します。

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

script_name

検索するスクリプト・ファイルを指定します。

例

次のコマンドは、IP アドレス 200.0.0.150 のハブ 1 から TFTP を用いてエラー・ログ `/tmp/error_log.dmp` を検索します。

```
retrieve error_log tftp 1 200.0.0.150 /tmp/error_log.dmp
```

関連コマンド

なし

SAVE

このコマンドを使用すると、ENABLE/DISABLE コマンドと SET コマンドで確立された現行の構成設置値を保管することができます。

ENABLE/DISABLE と SET コマンドで確立されたパラメーター値は、ただちに有効になりますが、FLASH メモリーには保管されません。これらの値を FLASH メモリーに保管するために、SAVE を使用します。ユーザー・コマンドや電源サイクルによって 8239 がリセットされると、FLASH メモリー内の値を使用して再初期化が行われます。

SAVE は、スタック内のすべてのハブの構成を保管します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド

- 管理者専用コマンド

save

▶▶—save—

例

次のコマンドは、現行の構成設定値を保管します。

save

関連コマンド

なし

SCRIPT

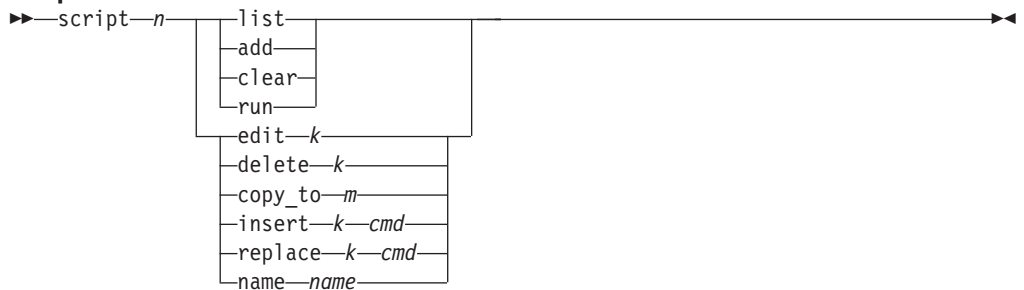
このコマンドを使用すると、指定するスクリプト・ファイルをリスト、作成、変更、または削除することができます。

注: スクリプトをインデックス番号で参照する場合には、番号の後に <Enter> キーを押さなければなりません。スクリプトを最初に定義または命名するには、そのスクリプトの番号を選択して <Enter> キーを押してから、スクリプトの命名に進みます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

script



script ? または script <Enter>

現在定義されているスクリプトの名前をリストします。コマンド行プロンプトに戻るには、<Esc> キーを押す必要があります。

n スクリプト番号を指定します。1 から 10 までの番号を指定できます。スクリプトを番号で選択した後は、必ず <Enter> キーを押さなければなりません。

list スクリプト *n* の詳細なリストを表示します。

add スクリプト *n* の末尾にコマンドの追加を開始します。これは、スクリプトをはじめて定義する場合に推奨される方法です。

clear スクリプト *n* をクリアします。

run スクリプト *n* を実行します。『replace』 コマンドがあるので、『run』 コマンドを指定するには少なくとも『ru』 までは入力しなければなりません。

注: **run** の開始後は、スクリプトの実行が完了するまで、すべての入出力およびキーボード入力は無視されます。

edit *k* スクリプト番号 *n* の行 *k* を編集します。*k* には、1 から 20 までの値を指定できます。

delete *k*
スクリプト番号 *n* の行 *k* を削除します。*k* には、1 から 20 までの値を指定できます。

copy_to *m*
スクリプト番号 *n* のコピー (コマンド) を、スクリプト番号 *m* に作成します。

insert *k cmd*
スクリプト *n* で、*cmd* を、行 *k* になるように挿入します。行 *k* の以前のコマンドおよびその他のコマンドの番号は、*k+1* に変更されます。*k* には 1 から 20 までの値を指定できます。

replace *k cmd*
スクリプト *n* で、行 *k* のコマンドを *cmd* で置き換えます。その他の行は影響を受けません。*k* には 1 から 20 までの値を指定できます。

name *name*
スクリプトに名前を付けます。*name* には 15 文字まで使用することができます。

例

- 次のコマンドは、スクリプト・テーブルから “enable_all_ports” という名前のスクリプトを削除します。

```
script enable_all_ports clear
```

- 次のコマンドは、スクリプト番号 3 に “enable_rem_flags” という名前のスクリプトをコピーします。

```
script enable_rem_flags copy_to 3
```

- 次のコマンドは、“enable_all_ports” という名前のスクリプトを実行します。

```
script enable_all_ports run
```

関連コマンド

- DISPLAY SCRIPTS

SET ACCESS_CONTROL_LIST

このコマンドを使用すると、特定のコミュニティで 8239 にアクセスできる IP アドレスを指定することができます。アクセス制御テーブルには 20 までの項目を入れることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set access_control_list

▶—set access_control_list—community—ipaddress—ipmask—▶

community

アクセス・リストを設定したいストリング。community は 1 文字から 128 文字までです。

ipaddress

この装置が関連するコミュニティで SNMP パケットを受け入れる IP アドレス。ipaddress の比較の前に、要求エンティティの IP アドレスが ipmask と AND 処理されます。ipmask が 0.0.0.0 に設定されていると、ipaddress 0.0.0.0 はすべての IP アドレスに一致することに注意してください。IP アドレスの形式の例は、200.0.0.2 です。

ipmask テーブル内の ipaddress との比較前に、要求エンティティの IP アドレスと AND 処理するマスク。結果がテーブル内の ipaddress に一致すると、そのアドレスは認証されます。省略時の値は 255.255.255.255 です。

例

次のコマンドは、ローカル 8239 のコミュニティ “admin” のアクセス制御リストに、項目を設定します。これは、“admin” のコミュニティ名を使用していれば管理者レベルの情報にアクセスできる IP アドレスを指定しています。

```
set access_control_list admin 200.0.0.100 255.255.255.255
```

関連コマンド

```
CLEAR ACCESS_CONTROL_LIST  
DISPLAY ACCESS_CONTROL_LIST
```

SET BOOTP_SERVER

このコマンドを使用すると、ハブが BOOTP 要求を送信する BOOTP サーバーの IP アドレスを定義することができます。IP アドレスを指定しないと、ハブは BOOTP 要求をブロードキャスト・アドレスに送信します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド

- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set bootp_server

▶▶—set bootp_server—ip address————▶▶

ip address

BOOTPサーバーの IP アドレスを指定します。*ip address* はピリオドで区切った 4 個の 10 進バイト (例: 192.122.19.4) です。省略時の設定は 255.255.255.255 で、これはブロードキャスト・アドレスです。

例

次のコマンドは、BOOTP 要求を IP アドレス 127.3.6.58 に送信するよう、ハブに指示します。

```
set bootp_server 127.3.6.58
```

関連コマンド

BOOTP
CLEAR BOOTP
ENABLE BOOTP

SET CLOCK

このコマンドを使用すると、ハブの内部クロックに時刻と日付をセットすることができます。初期化で内部クロックを設定し、その後夏時間や閏年のために時刻の変更が必要になることがあります。クロックには独自のバッテリーがあり、電源障害が発生しても時刻を保持します。

ハブは、クロック情報がセットされると自動的に保管します。SAVE を使用する必要はありません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set clock

▶▶—set clock————▶▶

例

次のコマンドは、内部クロックを 1998 年 3 月 6 日 05:53 にセットします。

```
set clock 1998 3 6 5 53
```

関連コマンド

DISPLAY CLOCK

SET COMMUNITY

このコマンドを使用すると、SNMP コミュニティー・テーブルに項目を作成することができます。

SNMP コミュニティー・テーブルは、SNMP 管理者のアクセス権を定義します。コミュニティ・テーブルには、最大 20 の項目を入れることができます。コミュニティ・テーブルの名前は、127 文字以内でなければなりません。コミュニティ名では大文字小文字の区別があります。たとえば、**Worf** と **worf** は異なるコミュニティ名です。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set community

```
▶▶ set community [user | administrator] | parms |
```

parms

```
| community_name ip_address subnet_mask |
```

user コミュニティーがユーザー・レベルのコマンドを発行できるよう指定します。

administrator

コミュニティが管理者レベルのコマンドを発行できるよう指定します。

community_name

この操作を適用するコミュニティの名前 (大文字小文字の区別があります) を指定します。

ip_address

この装置が関連するコミュニティで SNMP パケットを受け入れる IP アドレス (または、その一部)。指定の ip_address との比較の前に、要求エンティティの IP アドレスが指定の subnet_mask と AND 処理されます。subnet_mask が 0.0.0.0 に設定されていると、ip_address 0.0.0.0 はすべての IP アドレスに一致することに注意してください。ip_address の形式は、ピリオドで区切った 4 個の 10 進バイト (例: 0.67.75.3) です。省略時の値は 0.0.0.0 です。

subnet_mask

コミュニティ・テーブル内の ip_address との比較の前に、要求エンティティの IP アドレスと AND 処理するマスク。結果がコミュニティ・テ

ブル内の `ip_address` と一致すると、そのアドレスは認証されます。形式は、ピリオドで区切った 4 個の 10 進バイト (例: 255.255.255.255) です。省略時の値は 0.0.0.0 です。

例

次のコマンドは、“Admin” という名前のコミュニティーを作成します。

```
set community administrator Admin
```

関連コマンド

```
CLEAR COMMUNITY
```

```
DISPLAY COMMUNITY
```

SET EVENT_SCRIPT

このコマンドを使用すると、指定された RMON イベントの発生時に実行するスクリプトを割り当てることができます。

注: 接続できるイベントは 50 までです。event_script テーブルがいっぱいになった場合には、ユーザーが CLEAR EVENT コマンドを使用してスペースをクリアしなければなりません。

イベント番号は、固有のものでなければなりません。1 つのイベント番号はテーブルに 1 回だけリストされ、重複するものは削除されます。つまり、複数の異なったイベントで同じスクリプトを起動することはできますが、1 つのイベントで複数のスクリプトを起動することはできません。スクリプトの実行時には、出力は EIA-232 ポートに接続されているコンソールにのみ表示されます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set event_script

```
▶▶—set event_script—script_name—rmon_index—▶▶
```

script_name

RMON イベントの発生時に実行するスクリプト。script_name は、10 個のユーザー割り当て名の 1 つです。DISPLAY SCRIPT を使用して、スクリプト名を表示することができます。

rmon_index

スクリプトを起動する RMON イベント。rmon_index は RMON イベントの番号です。DISPLAY RMON EVENT_DATA を使用すると、イベントのインデックス番号順リストを表示することができます。

例

次のコマンドは、RMON イベント 5 の発生時に実行する “disable_port_6” という名前のスクリプトを割り当てます。

```
set event_script disable_port_6 5
```

関連コマンド

```
CLEAR EVENT_SCRIPT  
CLEAR SCRIPT  
DISPLAY RMON  
DISPLAY SCRIPT
```

SET GROUP NAME

このコマンドを使用すると、ポート・グループに名前を割り当てることができます。グループ名を割り当てた後は、そのグループの識別にはグループ番号ではなく、この名前を使用しなければなりません。たとえば、**Group1** を **Eng1** という名前に変更した場合、その後の管理コマンドではそのグループを **Eng1** で参照する必要があります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set group name

```
▶—set group name—old_group_name—new_group_name—▶
```

old_group_name

名前変更するグループを指定します。

new_group_name

グループの新しい名前を指定します。名前は 15 文字までの長さで、大文字と小文字のどちらを使用することもできます (グループ名では大文字小文字の区別はありません)。“all” は予約済みのグループ名で、使用することはできません。

例

次のコマンドは、“[Empty]” を “Eng2” に変更します。

```
set group name [Empty] Eng2
```

関連コマンド

```
CLEAR GROUP NAME  
CLEAR GROUP PORT  
DISPLAY GROUP  
ENABLE/DISABLE GROUP コマンド  
SET GROUP PORT
```

SET GROUP PORT

このコマンドを使用すると、ポート・グループにポートを割り当てることができます。ポートを設定すると、ENABLE/DISABLE GROUP を使用してポート・グループ内のすべてのポートを使用可能または使用不可にすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set group port

```
▶▶—set group port—group— all—  
|—hub.all—  
|—hub.port—
```

group ポートを割り当てるグループを指定します。

all 可能なすべてのハブおよびポートをグループに追加するよう指定します。

hub.all 指定するハブのすべてのポートを、指定するグループに追加することを示します。 *hub* は 1 から 8 までの値です。

hub.port

指定するグループに追加する特定の *hub.port* を指定します。 *hub* は 1 から 8 までの値、 *port* は 1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、すべてのハブのすべてのポートをグループ “floor2” に割り当てます。

```
set group port floor2 all
```

関連コマンド

- CLEAR GROUP NAME
- CLEAR GROUP PORT
- DISPLAY GROUP
- ENABLE/DISABLE GROUP コマンド
- SET GROUP NAME

SET HUB BEACON_THRESHOLD

このコマンドを使用すると、ビーコンによる折り返しの後でポートまたは管理インターフェース (モデル 1 のみ) がリングに再挿入できる回数を設定することができます。

8239 は、必要に応じてポートを折り返しさせ、ビーコン回復を行います。ハブはポート上でファントムの変位を検出すると、自動的にポートの折り返しを解除します。

ビーコン限界値は、ファントムの変位によってポートの折り返しを解除できる回数です。限界値を超えるとポートは折り返したままになり、ユーザーがポートを使用可能に戻すまで状況は **BCN THRES EXCEEDED** に変わります。ポートの **BCN FAULT** カウンターは、ポートが正しくリングに挿入された場合、またはモジュールがリセットされた場合に、リセットされます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

set hub beacon_threshold

```
▶▶—set hub beacon_threshold—hub_id—threshold————▶▶
```

└──all──┘

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

all このコマンドを、このスタック内のすべてのハブ・ユニットに対して発行するよう指定します。

threshold

ビーコンの発生後、ハブがポートをシャットダウンする前に許されるファントム変位の回数。*threshold* は 0 から 255 までの値です。0 を指定すると、無限の試行が許されます。省略時の設定値は 8 です。

例

次のコマンドは、ハブ 1 でビーコン限界値を 2 に設定します。

```
set hub beacon_threshold 1 2
```

関連コマンド

```
DISPLAY HUB  
DISPLAY PORT
```

SET HUB CHANGE_HUB_ID

このコマンドを使用すると、スタック内のハブのハブ ID を変更することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

set hub change_hub_id

```
▶▶—set hub change_hub_id—hub_id—new_hub_id————▶▶
```

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

new_hub_id

新しいハブ ID を指定します。*new_hub_id* は 1 から 8 までの値です。

例

次のコマンドは、ハブ 1 の ハブ ID を 2 に変更します。

```
set hub change_hub_id 1 2
```

関連コマンド

```
DISPLAY HUB  
SET HUB RENUMBER_HUB_IDS
```

SET HUB RENUMBER_HUB_IDS

このコマンドを使用すると、スタック内のすべてのハブ ID を、トークン・パッシングの順序に変更することができます。このコマンドは次の働きをします。

1. ローカル・ハブにハブ ID 1 を割り当てます。
2. ハブ 1 のスタック・アウトに接続されているハブに、ハブ ID 2 を割り当てます。
3. ハブ 2 のスタック・アウトに接続されているハブに、ハブ ID 3 を割り当てます。
4. スタック接続の順序に応じて、同様にハブ ID の割り当てを続けます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

set hub renumber_hub_ids

```
▶▶—set hub renumber_hub_ids—▶▶
```

例

次のコマンドは、ハブ ID を変更します。

```
set hub renumber_hub_ids
```

関連コマンド

```
DISPLAY HUB  
SET HUB CHANGE_HUB_ID
```

SET HUB RING_SPEED

このコマンドを使用すると、ハブをリング速度 4 Mbps または 16 Mbps で実行するよう、設定することができます。省略時の設定値は 16 Mbps です。

このコマンドを発行する場合、このハブと同じセグメント上の他のハブが、同じ速度で動作しているかどうかを検証することはできません。また、ハブに接続されているポートが使用不可になっているかどうかを検証することもできません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

set hub ring_speed

```
▶▶—set hub ring_speed—hub_id—ring_speed—▶▶  
                  └─all─┘
```

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

all スタック内のすべてのハブ・ユニットのリング速度を設定します。

ring_speed

4 Mbps には 4、16 Mbps には 16 を指定します。

例

次のコマンドは、ハブ 5 をリング速度 16 Mbps に設定します。

```
set hub ring_speed 5 16
```

関連コマンド

DISPLAY HUB

SAVE

SET HUB SPEED_THRESHOLD

このコマンドを使用すると、ポートが誤った速度でリングへの挿入を試みられる回数を設定することができます。

限界値を超えるとポートは折り返ししたままになり、ユーザーがポートを使用可能に戻すまで状況は **SPEED THRES EXCEEDED** に変わります。ポートの速度 mismatch・カウンターは、ポートが正しくリングに挿入された場合、またはモジュールがリセットされた場合に、リセットされます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

set hub speed_threshold

```
▶▶—set hub speed_threshold—hub_id—threshold—▶▶  
                          └─all─┘
```

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

all スタック内のすべてのハブ・ユニットの速度限界値を設定します。

threshold

ハブがポートをシャットダウンする前に許される、誤った速度による挿入試

SET MANAGEMENT_INTERFACE 802.5_GROUP

このコマンドを使用すると、IEEE 802.5 MIB 統計テーブルの統計収集を、使用可能または使用不可にすることができます。省略時の設定は使用不可です。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

set management_interface 802.5_group

▶▶—set management_interface 802.5_group—enable|disable—hub_id————▶▶

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 1 で 802.5 を使用可能にします。

```
set management_interface 802.5_group enable 1
```

関連コマンド

DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE

SET MANAGEMENT_INTERFACE ACTIVE_MONITOR_PARTICIPATION

このコマンドを使用すると、機会があれば管理インターフェースがアクティブ・モニター・コンテンツに加わるかどうかを指定することができます。省略時の設定は使用不可です。

新規のアクティブ・モニターを判別する必要がある場合には、管理インターフェースはこの設定値にはかかわりなく、プロセスを検出して開始します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

set management_interface active_monitor_participation

▶▶—set management_interface active_monitor_participation—| parms |————▶▶

parms

|—enable—| hub_id————|
|—disable—|

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、アクティブ・モニター・コンテンションを使用不可にします。

```
set management_interface active_monitor_participation disable 1
```

関連コマンド

```
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE
```

SET MANAGEMENT_INTERFACE ADMINISTRATIVE_MODE

このコマンドを使用すると、8239 モデル 1 上で管理インターフェースを使用可能または使用不可にすることができます。

インターフェースを使用可能にすると、管理インターフェースをスタック・リングに挿入できるようになります。インターフェースを使用不可にすると、管理インターフェースはスタック・リングから除去されます。

重要: 管理モードを使用不可にすると、モデル 1 へのインバンド接続は失われます。Administrative_Mode を使用不可にした後で使用可能にするには、EIA-232 ポートを使用しなければなりません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

set management_interface administrative_mode

```
▶▶—set management_interface administrative_mode—enable|disable—hub_id————▶▶
```

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 4 の管理インターフェースを使用不可にします。

```
set management_interface administrative_mode disable 4
```

関連コマンド

```
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE
```

SET MANAGEMENT_INTERFACE ARP_RESOLVE_METHOD

このコマンドを使用すると、送信するアドレス解決プロトコル (ARP) 要求のソース・ルーティング・ビットの設定方法を指定して、8239 を構成することができます。

管理インターフェースは通常、ARP 要求のソース・ルーティング・ビットをセットします。スタックが、ソース・ルーティングをサポートしていない装置と同じ IP サブネットワークに接続されている場合には、ARP 要求のソース・ルーティング・ビットをクリアする必要があります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

set management_interface arp_resolve_method

```
▶▶—set management_interface arp_resolve_method—| parms |—hub_id—————▶▶
```

parms

```
|—source_route—————|
|—non_source_route———|
```

source_route

ARP 要求のソース・ルーティング・ビットをセットします。この値は省略時の設定です。

non_source_route

ARP 要求のソース・ルーティング・ビットをクリアします。

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ARP 要求でソース・ルーティング・ビットをクリアするよう、ハブ 1 を設定します。

```
set management_interface arp_resolve_method non_source_route 1
```

関連コマンド

DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE

SET MANAGEMENT_INTERFACE DIAGNOSTICS_WRAP

このコマンドを使用すると、管理インターフェースで診断折り返しが必要かどうかを指定することができます。このコマンドは、管理インターフェースをリングに正しく挿入できない場合に (アダプター状況が OPENED)、問題判別のためだけに使用してください。管理インターフェースが外部 (または内部) 折り返しモードになっている場合には、管理インターフェースの Administrative_Mode を使用不可にする必要があります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

set management_interface diagnostics_wrap

```
▶▶—set management_interface diagnostics_wrap—wrap_type—hub_id—————▶▶
```

wrap_type

実行する折り返しのタイプ。有効な値は、**external** (ローブ折り返し)、**internal** (MAC 折り返し)、または **none** (折り返しなし - 省略時の設定) です。

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は 1 から 8 までの値です。ハブ ID は 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 7 で管理インターフェースの内部折り返しを行うことを指定します。

```
set management_interface diagnostics_wrap internal 7
```

関連コマンド

- DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE
- SET MANAGEMENT_INTERFACE ADMINISTRATIVE_MODE

SET MANAGEMENT_INTERFACE EARLY_TOKEN_RELEASE

このコマンドを使用すると、早期トークン解放を使用可能または使用不可にすることができます。早期トークン解放では、管理インターフェースはフレーム・ヘッダーが戻されたかどうかにかかわらず、フレーム伝送の完了と同時に新規トークンを解放することができます。このオプションは、16 Mbps トークンリング・ネットワークのみで有効です。省略時の設定は使用可能です。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

```
set management_interface early_token_release
```

```
▶—set management_interface early_token_release—enable|disable—hub_id—▶
```

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 1 の早期トークン解放を使用不可にします。

```
set management_interface early_token_release disable 1
```

関連コマンド

```
DISPLAY HUB  
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE
```

SET MANAGEMENT_INTERFACE LOCALLY_ADMIN_ADDRESS

このコマンドを使用すると、管理インターフェースでローカル管理の MAC アドレスを指定することができます。ローカル管理アドレスを活動化するには、SET MANAGEMENT_INTERFACE MAC_ADDR_TYPE を発行する必要があります。

ローカル管理アドレスが活動的に使用されていて変更されると、すべての ARP キャッシュから古い MAC アドレスがクリアされるまでは、他のステーションへの接続が失われることがあります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

set management_interface locally_admin_address

▶—set management_interface locally_admin_address—hub_id—mac_address—▶

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

mac_address

ローカル管理 MAC アドレスを指定します。コロンで区切った 6 個の 16 進バイトです。

例

次のコマンドは、ハブ 2 のローカル管理 MAC アドレスを新しい値に設定します。

```
set management_interface locally_admin_address 2 40:00:00:00:99:00
```

関連コマンド

DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE

SET MANAGEMENT_INTERFACE MAC_ADDRESS_TYPE

SET MANAGEMENT_INTERFACE MAC_ADDRESS_TYPE

このコマンドを使用すると、ハブが省略時の (組み込みの) MAC アドレスを使用するか、ユーザー定義の (ローカル管理) MAC アドレスを使用するか指定することができます。

管理インターフェースによって使用される MAC アドレスが変更された後には、すべての ARP キャッシュから古い MAC アドレスがクリアされるまでは、他のステーションへの接続が失われることがあります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

set management_interface mac_address_type

▶▶—set management_interface mac_address_type

└─	burned_in	└─ hub_id ─▶▶
	locally_admin	

burned_in

ハブがローカル管理 MAC アドレスではなく、省略時の MAC アドレスを使用するよう指定します。

locally_admin

ローカル管理 MAC アドレスを使用するよう指定します。

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 7 がローカル管理アドレスを使用するよう指定します。

```
set management_interface mac_address_type locally_admin 7
```

関連コマンド

```
DISPLAY HUB  
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE  
SET MANAGEMENT_INTERFACE LOCALLY_ADMIN_ADDRESS
```

SET MANAGEMENT_INTERFACE RMON2_MODE

このコマンドを使用すると、RMON2 のバージョンを選択することができます。ECAM は RMON2 のプロプラエタリー・バージョンで、RMON2 が標準化される前にインプリメントされたものです。LAN ReMon の一部のバージョンは、ダウンロード可能なオプションとして、ECAM とともにのみ動作します。それに対して RMON2 は、RMON2 の標準バージョンです。ECAM と RMON2 のいずれか一方を選択しなければなりません。

このコマンドが有効になるためには、ハブの構成を保管し、ハブをリセットしなければなりません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド

set management_interface rmon2_mode

▶▶—set management_interface rmon2_mode

└─	ecam	└─ hub_id ─▶▶
	rmon2	
	none	

ecam ECAM 統計収集を指定します。

rmon2

標準 RMON2 統計収集を指定します。この値が省略時の設定です。

none RMON2 統計収集を使用しないことを指定します。

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 7 が ECAM を使用するよう指定します。

```
set management_interface rmon2_mode ecam 7
```

関連コマンド

```
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE  
RESET_HUB  
SAVE
```

SET MANAGEMENT_INTERFACE RPS_TRAPS

このコマンドを使用すると、RPS のトラップ生成オプションを使用可能または使用不可にすることができます。使用可能にした場合、このコマンドは RPS 機能に対して、ステーションがリングに挿入された場合にレポートするよう指示します。省略時の値は使用可能です。

このコマンドは ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE RPS_TRAPS と同じ機能を果たしますが、Management_Interface コマンドはローカル 8239 に制約されていない点だけが異なります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

set management_interface rps_traps

```
▶▶—set management_interface rps_traps—[enable]—hub_id—▶▶  
                                          [disable]
```

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 1 で RPS トラップを使用可能にします。

```
set management_interface rps_traps enable 1
```

関連コマンド

```
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE
```

SET MANAGEMENT_INTERFACE SURROGATE_GROUP

このコマンドを使用すると、サロゲート・グループを使用可能または使用不可にすることができます。 ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN も使用することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

set management_interface surrogate_group

▶▶—set management_interface surrogate_group—enable—hub_id—▶▶
 └─disable─┘

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、サロゲート・グループを使用可能にします。

```
set management_interface surrogate_group enable 1
```

関連コマンド

```
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE  
ENABLE/DISABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
```

SET MANAGEMENT_INTERFACE SYSTEM_CONTACT

このコマンドを使用すると、個人の名前、位置、会社、電話番号などの情報を保管することができます。 127 文字までの 1 行の情報を入力することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set management_interface system_contact

▶▶—set management_interface system_contact—hub_id—contact—▶▶

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

contact システム連絡先を指定する 127 文字以内の情報を入力します。

例

次のコマンドは、ハブ 1 にシステム連絡先を定義します。

```
set management_interface system_contact 1 Susan Wu, 696-522-1219
```

関連コマンド

DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE

SET MANAGEMENT_INTERFACE SYSTEM_LOCATION

このコマンドを使用すると、8239 の位置を記述することができます。127 文字までの 1 行の情報を入力することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set management_interface system_location

▶▶—set management_interface system_location—hub_id—location————▶▶

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

location

位置を指定する 127 文字以内の情報を入力します。

例

次のコマンドは、ハブ 1 に位置情報を定義します。

```
set management_interface system_location 1 Lisbon, Building 1, Floor 3
```

関連コマンド

DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE

SET MANAGEMENT_INTERFACE SYSTEM_NAME

このコマンドを使用すると、8239 にシステム名を入力することができます。127 文字までの 1 行の情報を入力することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set management_interface system_name

▶▶—set management_interface system_name—hub_id—name————▶▶

hub_id この操作を行うハブを指定します。*hub_id* は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

name システム名を指定する 127 文字以内の情報を入力します。

例

次のコマンドは、ハブ 1 にシステム名を定義します。

```
set management_interface system_name 1 bldg 2 hub
```

関連コマンド

```
DISPLAY MANAGEMENT_INTERFACE
```

SET RMON ALARM

このコマンドを使用すると、指定するパラメーターに応じてイベントを起動するアラームをセットアップすることができます。

各サンプルは、上限の限界値と下限の限界値の 2 つの限界値を比較されます。各サンプルは、絶対値でもデルタ値でもかまいません。デルタ値は、現行の値と前のサンプルの値との差です。値が限界値を超えると、その限界値に関連するイベントが生成されます。限界値は逆の限界値 (上限または下限) を超えるまでは再設定されず、1 つのサンプルが特定の限界値の上下を移動して複数のイベントが発生するのを防いでいます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set rmon alarm

```
▶▶—set rmon alarm—  
└─ mlstats—mlstat—┘ | parms1 | | parms2 | | parms3 | ▶▶  
└─ pstats—pstat—┘
```

parms1

```
|— rising —|  
|— falling —|  
|— both —|
```

parms2

```
|— delta_type —|  
|— absolute_type —|
```

parms3

```
|— threshold—event—mm:ss —|
```

mlstats

この操作の MAC レイヤー RMON 統計グループを選択します。

mlstat この操作の統計を指定します。 *mlstat* には次の値を指定することができます。

- Drop_Events

- Octets
- Packets
- Ring_Purge_Events
- Ring_Purge_Packets
- Beacon_Events
- Beacon_Time
- Beacon_Packets
- Claim-Token_Events
- Claim-Token_Packets
- NAUN_Change
- Line_Errors
- Internal_Errors
- Burst_Errors
- AC_Errors
- Abort_Errors
- Lost_Frame_Errors
- Congestion_Errors
- Frame_Copied_Errors
- Frequency_Errors
- Token_Errors
- Soft_Error_Reports
- Ring_Poll_Events

pstats この操作に、その他の RMON 統計グループを選択します。

pstat この操作の統計を指定します。 *pstat* には次の値を指定することができます。

- Drop_Events
- Octets
- Packets
- Broadcast_Packets
- Multicast_Packets

rising *thresh*

統計値が限界値を上回るとイベントを起動するよう指定します。

event 上限によって起動される RMON イベントのインデックス番号を指定します。 SET RMON EVENT を使用してイベントを作成し、 DISPLAY RMON EVENT_DATA を使用してイベントのインデックス番号を表示することができます。

falling *thresh*

統計値が限界値を下回るとイベントを起動するよう指定します。

event 下限によって起動される RMON イベントのインデックス番号を指定します。

SET RMON EVENT を使用してイベントを作成し、 DISPLAY RMON EVENT_DATA を使用してイベントのインデックス番号を表示することができます。

mm:ss サンプルの時間間隔を指定します。*mm* は 0 から 59 分、*ss* は 0 から 59 秒です。

both 上限と下限の両方の限界値を設定します。**both** を選択した後、上限値、下限値、イベントの入力を求めるプロンプトが出されます。

例

次のコマンドは、ローカル 8239 の RMON エージェントのイベント 2 について、1 分間に 5 回を超える BeaconEvents が発生するとアラームを起動するよう限界値を設定します。

```
set rmon alarm mlstat beacon_events rising delta_type 5 2 01:00
```

注: このコマンドを発行する前に対応するイベントを作成しておく必要があり、このコマンドを入力するためにそのイベントのインデックス番号を知っている必要があります。

関連コマンド

```
CLEAR RMON  
DISPLAY RMON  
ENABLE RMON EVENT
```

SET RMON EVENT

このコマンドを使用すると、 SET RMON ALARM で作成されたアラームで起動するイベントを使用可能にすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set rmon event



log イベント・ログに項目を書き込みます。

none 何も行いません。

log_trap

イベント・ログに項目を書き込み、指定されたコミュニティーにトラップを送信します。

trap RMON2 または ASPEN MIB トラップ・テーブルの指定されたコミュニティに、トラップを送信します。

community

トラップの受信側の SNMP コミュニティ名を指定します。SHOW COMMUNITY を使用して、コミュニティをリストすることができます。LAN ReMon を使用すると、RMON2 または ASPEN トラップ・テーブルを表示することができます。

注: 8239 トラップ・テーブルに RMON またはすべてのタイプのトラップ・コミュニティを設定すると、その名前のコミュニティが RMON2/ASPEN MIB トラップ・テーブルにも設定されます。このイベントを使用するためにアラームがセットアップされた場合には、アラームが起動されると、SNMP トラップがそのトラップ・コミュニティに送信されます。

例

次のコマンドは、コミュニティ名 **traps_community** に送信されるトラップ・メッセージを使用可能にします。

```
set rmon event trap traps_community
```

関連コマンド

```
CLEAR RMON  
DISPLAY COMMUNITY  
DISPLAY RMON  
ENABLE RMON ALARM  
ENABLE RMON EVENT  
SET RMON ALARM  
SET TRAP_COMMUNITY
```

SET RMON HISTORY_CONTROL

このコマンドを使用すると、MAC レイヤーおよびその他の統計の活動記録の収集をセットアップすることができます。

8239 モデル 1 内の RMON エージェントは、バケットと呼ばれるサンプル間隔で、MAC レイヤー・ネットワーク統計およびその他の統計を収集します。ユーザー作成の制御テーブル項目については、RMON エージェントは 50 のバケットを保管します。エージェントが 50 のバケットを保管した後は、新しいバケットを保管することに最も古いバケットを削除します。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set rmon history_control

▶▶—set rmon history_control—*mm:ss*—▶▶

mm:ss RMON 収集の時間間隔を分と秒で指定します。 *mm* は 0 から 59 までの値、*ss* は 0 から 59 までの値です。

例

次のコマンドは、RMON エージェントが 10 分間隔で活動記録をモニターするよう設定します。

```
set rmon history_control 10:00
```

関連コマンド

```
CLEAR RMON  
DISPLAY RMON CONTROL HISTORY  
DISPLAY RMON HISTORY_ML_DATA  
DISPLAY RMON HISTORY_P_DATA  
ENABLE RMON HISTORY
```

SET RMON TOPN_HOSTS

このコマンドを使用すると、RMON プローブによる RMON ホスト・トップ N グループ統計の収集を使用可能にすることができます。

ホスト・トップ N グループの統計は、次のように収集されます。

1. テスト間隔を指定する制御テーブル項目と、その間隔でモニターする統計を作成します。
2. RMON プローブは、指定された間隔の間、統計をモニターします。この間、データは表示されません。
3. 間隔が終了すると、RMON はモニターした統計値に基づいてトップ 10 のホストをランク付けします。DISPLAY RMON TOPN_HOSTS を使用して、データを表示することができます。

RMON プローブは、この制御テーブル項目についてはこれ以上データを収集しません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set rmon topn_hosts

▶▶—set rmon topn_hosts—*statistic—mm:ss*—▶▶

statistic

ホストをランク付けする統計を指定します。 *statistic* には、次のいずれかを指定することができます。

- in_octets
- in_packets
- out_bcasts
- out_errors
- out_mcasts
- out_octets
- out_packets

mm:ss RMON 収集の時間間隔を分と秒で指定します。 *mm* は 0 から 59 までの値、*ss* は 0 から 59 までの値です。

例

次のコマンドは、30 分の間に各ホストによって送信されたパケットの数に基づいてホストをランク付けする、ホスト・トップ N モニターを使用可能にします。

```
set rmon topn_hosts out_packets 30:00
```

関連コマンド

```
CLEAR RMON  
DISPLAY RMON CONTROL TOPN_HOSTS  
DISPLAY RMON TOPN_HOSTS_DATA
```

SET SCHEDULE

このコマンドを使用すると、スクリプトを定期的に行うようスケジュールすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set schedule

```
▶▶—set schedule—script—script_name—sched_index—  
|—interval—sched_index—i_time—  
|—month_periodic—sched_index—day_of_month—time—  
|—day_periodic—sched_index—day—time—  
|—date—sched_index—date—time—▶▶
```

script_name

スクリプトを指定します。 *script_name* はユーザーが割り当てた固有の 10 個の名前のいずれか 1 つです。 DISPLAY SCRIPT を使用して、スクリプトをリストすることができます。

sched_index

作成または修正するスケジュール・インデックスを指定します。*sched_index* 1 から 20 までの値です。 **all** オプションを指定した **DISPLAY SCHEDULE** を使用すると、既存のインデックスをリストすることができます。

i_time **hh:mm** 形式で時間間隔を指定します。

day_of_month

1 から 31 までの日付を指定します。2 月には 30 と 31 は無効で、入力されているとそれぞれ自動的に 3 月 1 日と 3 月 2 日に変換されます。

time 時間を指定し、オプションで分を指定できます。時間と分はともに、1 桁または 2 桁で指定することができます。

day 曜日または日のグループを指定します。次のいずれかを指定することができます。 Mon, Tue, Wed, Thr, Fri, Sat, Sun, Weekdays, Weekends, Everyday。

date *mm/dd* 形式で日付を指定します。*mm* は 1 から 12 までの値、*dd* は 1 から 31 までの値です。無効な日付の検査は行われません。

例

次のコマンドは、スクリプト 3 を毎月曜日に実行します。

```
set schedule day_periodic 3 mon 00:00
```

例

次のコマンドは、特定の日にスクリプトを実行します (スクリプト 7 はすでに設定されています)。

```
set schedule date 7 7/25 17:00
```

例

次のコマンドは、2 時間ごとにスクリプト 8 を実行します。

```
set schedule interval 8 2:00
```

関連コマンド

DISPLAY SCHEDULE
DISPLAY SCRIPT
ENABLE/DISABLE SCHEDULE

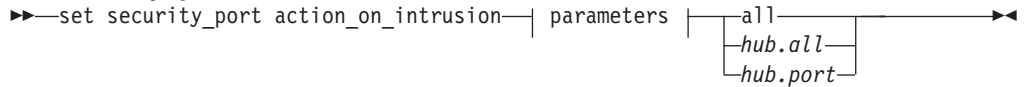
SET SECURITY_PORT ACTION_ON_INTRUSION

このコマンドを使用すると、セキュリティーの侵害が発生した場合に 8239 がとる処置を定義することができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

set security_port action_on_intrusion



parameters



disable_and_trap

ポートを使用不可にし、コミュニティ・テーブルで定義されているトラップを送信します。

disable_only

ポートを使用不可にします。

no_action

ハブは何も行いません。

trap_only

コミュニティ・テーブルで定義されているトラップを送信します。

all この操作を、このスタック内のすべてのハブのすべてのポートに対して行うよう指定します。

hub.all 指定するハブのすべてのポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値です。

hub.port

この操作の対象となるポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値、*port* は 1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、ポート 1、ハブ 3 で侵害が発生した場合に、ポートを使用不可にするよう指定します。

```
set security_port action_on_intrusion disable_only 3.1
```

関連コマンド

DISPLAY SECURITY コマンド

SAVE

SET SECURITY_PORT

SET SECURITY_PORT CAPTURE

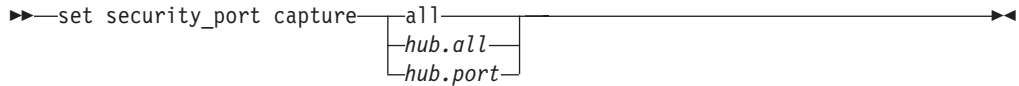
このコマンドを使用すると、ポートで現在活動状態のすべての MAC アドレスを、保護 MAC アドレス・テーブルにコピーすることができます。保護 MAC アドレス・テーブルには、スタックの各ポートごとに最大 16 の MAC アドレス入れることができます。

MAC のない装置がポートに接続されている場合には、保護 MAC アドレス・テーブルで MAC アドレスが“MAC-less Device”を表示されます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

set security_port capture



all この操作を、このスタック内のすべてのハブのすべてのポートに対して行うよう指定します。

hub.all 指定するハブのすべてのポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値です。

hub.port

この操作の対象となるポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値、*port* は 1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、ハブ 4 のすべての MAC アドレスを、保護 MAC アドレス・テーブルにコピーします。

```
set security_port capture 4.all
```

関連コマンド

DISPLAY SECURITY コマンド

SAVE

SET SECURITY_PORT MAC_ADDRESS

このコマンドを使用すると、保護 MAC アドレス・テーブルに MAC アドレスを入力することができます。保護 MAC アドレス・テーブルには、スタックの各ポートごとに最大 16 の MAC アドレス入れることができます。保護 MAC アドレス・テーブル内のアドレスは、ポートで検出されるとセキュリティ“侵害”を起こしません。セキュリティ“侵害”が発生する前に、そのポートでセキュリティ機能を使用可能にしておく必要があります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド

set security_port mac_address

▶▶—set security_port mac_address—*mac_address*—
all
hub.all
hub.port

mac_address

保護 MAC アドレス・テーブルに入力する MAC アドレスを指定します。
mac address は、6 つの 16 進バイトをコロンで区切って並べたアドレスです。MAC のない装置を追加するには、00:00:00:00:00:00 を使用してください。

all この操作を、このスタック内のすべてのハブのすべてのポートに対して行うよう指定します。

hub.all 指定するハブのすべてのポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値です。

hub.port

この操作を行うポートを指定します。*hub* は 1 から 8 までの値、*port* は 1 から 32 までの値です。

例

次のコマンドは、MAC アドレス 08:00:5A:00:88:12 を、ポート 2、ハブ 4 の保護 MAC アドレス・テーブルに入力します。

```
set security_port mac_address 08:00:5A:00:88:12 4.2
```

関連コマンド

DISPLAY SECURITY コマンド

SAVE

SET TERMINAL BAUD

このコマンドを使用すると、EIA-232 ポートのボー・レートを設定することができます。このポートと接続されている装置のボー・レートは一致していなければなりません。

EIA-232 ポートから異なるボー・レートに設定されている装置を接続するには、EIA-232 ポートのボー・レートを、装置が使用しているボー・レートに変更してください。

1. 端末を 9 600 ボー (省略時の 8239 設定値) に設定し、**Enter** キーを押してハブにアクセスします。
2. SET TERMINAL BAUD を発行して、ボー・レートを仕様に合わせて設定します。新しい速度を設定すると、ハブへの接続は失われます。
3. 端末接続を外し、異なるボー・レートの装置を接続して、ハブへの接続を再開します。
4. SAVE を発行して、新しい端末設定を保管します。

診断の実行中は、ボー・レートは 9 600 に設定されます。SET TERMINAL BAUD コマンドは、診断テストが終了した後 のボー・レートに影響を与えません。診断に失敗した場合、問題の原因を調べる前に、端末のボー・レートが 9 600 に設定されていることを確認してください。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set terminal baud

▶—set terminal baud—*rate*—▶

rate ボー・レートを選択します。*rate* は次のいずれかです。

- 4 800
- 9 600
- 19 200
- 38 400
- 57 600
- 115 200

省略時の設定は 9 600 です。

例

次のコマンドは、ボー・レートを 4 800 に設定します。

```
set terminal baud 4800
```

関連コマンド

DISPLAY TERMINAL

SET TERMINAL コマンド

SET TERMINAL PROMPT

このコマンドを使用すると、端末セッションで端末に表示されるプロンプトをカスタマイズすることができます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set terminal prompt

▶—set terminal prompt—*new_prompt*—▶

new_prompt

端末セッションで表示されるプロンプトを指定します。 **new_prompt** は 15 文字以内です。省略時の設定は `?=Help>` です。

例

次のコマンドは、プロンプトを “my_hub>” に設定します。

```
set terminal prompt my_hub>
```

関連コマンド

DISPLAY TERMINAL

SET TERMINAL コマンド

SET TERMINAL TIMEOUT

このコマンドを使用すると、一定の分数だけ何も入力しないと自動的にログアウトするよう、8239 を構成することができます。タイムアウトは Telnet セッションだけに有効です。EIA-232 ポート・セッションには、タイムアウトは設定されません。

注: 変更を加えた場合は、ログバックしてそれを保管する前に 8239 がリセットされると失われます。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set terminal timeout

```
▶—set terminal timeout—————▶
```

timeout

タイムアウトの時間を分単位で指定します。 **timeout** は 1 から 60 までの値で、0 はタイムアウト機能を使用不可にします。省略時の設定は 15 です。

例

次のコマンドは、10 分間活動がない場合に 8239 からログアウトします。

```
set terminal timeout 10
```

関連コマンド

DISPLAY TERMINAL

SET TERMINAL コマンド

SET TR_SURROGATE CRS_STATION

このコマンドを使用すると、ステーションの機能を設定することができます。

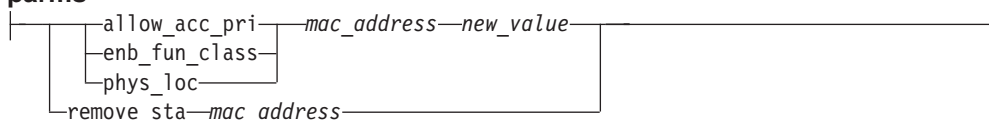
使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set tr_surrogate crs_station

▶▶—set tr_surrogate crs_station—| parms |—————▶▶

parms



allow_acc_pri

指定された MAC アドレスをもつステーションが送信できる、最大のトークン・アクセス優先順位を指定します。有効な値は 0 から 3 までです。

enb_fun_class

指定された MAC アドレスをもつステーションが送信できる、機能クラスを指定します。有効な値は 0 から X'FFFFX' までです。

phys_loc

指定された MAC アドレスをもつステーションによって送信されるレポート・リング・ステーション・アドレス MAC フレームで、その一部として伝送される物理ロケーション・サブベクトルを設定します。

remove_sta

指定された MAC アドレスをもつステーションに、ステーション除去 MAC フレームを送信します。

mac_address

このパラメータを設定しているステーションの MAC アドレスを指定します。

new_value

allow_acc_pri、**enb_fun_class**、または **phys_loc** パラメータに新規の値を指定します。新規の値は 16 進数です。

例

次のコマンドは、ステーション除去 MAC フレームを、指定された MAC アドレスに送信させます。

```
set tr_surrogate crs_station remove_sta 00:04:e4:40:00:c0
```

関連コマンド

```
DISPLAY TR_SURROGATE コマンド
ENABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS CRS_ADMIN
ENABLE TR_SURROGATE SURR_STATUS SURR_ADMIN
```

SET TR_SURROGATE SEGMENT_NUMBER

このコマンドを使用すると、管理インターフェースがモニターしているセグメントに関連するリング・セグメント番号を構成することができます。このリング・セグメント番号は、ソース・ルーティングを行っているブリッジや他の装置で使用されている値と同じものでなければなりません。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者またはユーザーのコマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set tr_surrogate segment_number

```
▶▶—set tr_surrogate segment_number—segment_value————▶▶
```

segment_value

このセグメントに関連づけるリング・セグメント番号を指定します。
seg_value は 0 から FFF までの16 進数です。

例

次のコマンドは、セグメント番号を 42 に設定します。

```
set tr_surrogate segment_number 42
```

関連コマンド

```
DISPLAY TR_SURROGATE SURR_STATUS
```

SET TRAP_COMMUNITY

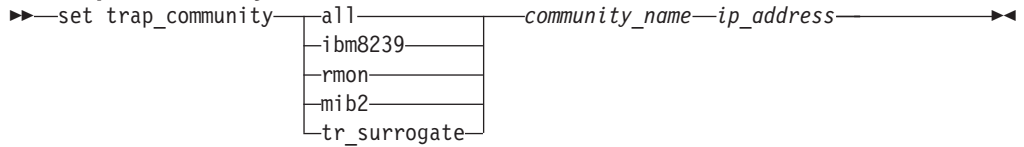
このコマンドを使用すると、SNMP コミュニティー・テーブルに項目を作成することができます。SNMPトラップ・コミュニティ・テーブルは、トラップの送信先の IP アドレスを定義します。

コミュニティ・テーブルには、最大 10 の項目を入れることができます。コミュニティ項目の名前は、15 文字以内でなければなりません。コミュニティ名では大文字小文字の区別があります。たとえば、**Worf** と **worf** は異なるコミュニティ名です。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 専用コマンド
- 管理者専用コマンド
- ローカル 8239 で実行するためにローカル 8239 でのみ発行可能

set trap_community



all すべてのトラップ (たとえば、RMON、8239 トラップ、MIB-II トラップ、TR サロゲート・トラップ) を、指定されたコミュニティ名に関連づけます。項目は RMON2 トラップ・テーブルまたは ASPEN MIB トラップ・テーブルにも追加されます。

ibm8239

すべての IBM 8239 MIB トラップを指定されたコミュニティ名に関連付けます。

rmon すべての RMON イベントを指定されたコミュニティ名に関連づけます。項目は RMON2 トラップ・テーブルまたは ASPEN MIB トラップ・テーブルにも追加されます。

mib2 すべての MIB II トラップを指定されたコミュニティ名に関連づけます。

tr_surrogate

すべての IBM トークンリング・サロゲート MIB トラップを指定されたコミュニティ名に関連づけます。

community_name

この操作を適用するコミュニティの名前を指定します。このパラメーターでは大文字小文字の区別があります。コミュニティ名を入力するか、**all**を入力してすべてのコミュニティを指定します。

ip_address

指定されたコミュニティに追加する特定の IP アドレスを指定します。IP アドレスは、4 個の 10 進数をピリオドで区切って並べた形式で入力してください。

例

次のコマンドは、RMON という名前のトラップ・コミュニティ項目を作成します。また、このコミュニティに IP アドレス 2.13.34.24 を追加して、このコミュニティを指定するすべての RMON イベントが指定された IP アドレスに送信されるようにします。

```
set trap_community rmon RMON 2.13.34.24
```

関連コマンド

```
CLEAR TRAP_COMMUNITY  
DISPLAY COMMUNITY
```

WRAP|UNWRAP

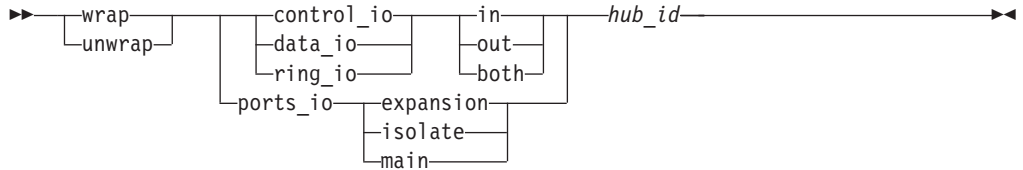
このコマンドを使用すると、ポート、リングイン/アウト、またはデータ・イン/アウトをスタック・リングから折り返しまたは折り返しを解除する、あるいはコントロール・イン/アウトをスタック間制御リングから折り返しまたは折り返しを解除することができます。このコマンドで `data_io` 以外のパラメーターが使用されるのは、通常の操作ではなく、問題の分離のためです。データ・リングのセグメント化を行う場合、このコマンドを `data_io` パラメーターと共に使用します。

重要: このコマンドを発行すると、スタックの管理機能またはスタック・リングのデータ経路に影響を与えることがあります。

使用上の注意

- 8239 モデル 1 または 8239 モデル 2 のコマンド
- 管理者専用コマンド

wrap|unwrap



in この操作に、`ring_in`、`data_in`、または `control_in` を指定します。

out この操作に `ring_out`、`data_out`、または `control_out` を指定します。

both この操作にインとアウトの両方を指定します。

expansion

この操作に拡張ポートを指定します (ポート 17 から 32 まで)。

isolate

この操作にポート分離折り返し点を指定します。

main この操作にメイン・ポートを指定します (ポート 1 から 16 まで)。

hub_id この操作を行うハブを指定します。hub_id は、1 から 8 までの値です。ハブ ID は、各 8239 のフロント・パネルに表示されています。

例

次のコマンドは、ハブ 1 のポート 1 から 16 までをスタック・リングから折り返しさせます (すなわち、このハブのポート 1 から 16 までをスタック・リングから切断します)。

```
wrap ports_io main 1
```

関連コマンド

- DISPLAY RING_IO
- DISPLAY WRAP_POINTS
- ENABLE/DISABLE RING_IO

用語集

この用語集には、次の資料からの用語および定義が含まれています。

- *American National Standard Dictionary for Information Systems* , ANSI X3.172-1990, copyright 1990 by the American National Standards Institute (ANSI). この資料は、American National Standards Institute, 11 West 42nd Street, New York, New York 10036 から購入できます。定義は、定義の後の記号 (A) によって識別されます。
- ANSI/EIA Standard-440-A, *Fiber Optic Terminology* Copies may be purchased from the Electronic Industries Association, 2001 Pennsylvania Avenue, N.W., Washington, DC 20006. 定義は、定義の後の記号 (E) によって識別されます。
- *Information Technology Vocabulary* developed by Subcommittee 1, Joint Technical Committee 1, of the International Organization for Standardization and the International Electrotechnical Commission (ISO/IEC JTC1/SC1). この vocabulary の発行された部分の定義は、定義の後の記号 (I) によって識別されます。ISO/IEC JTC1/SC1 で検討中の国際標準草案、委員会草案、および作業文書からとられた定義は、定義の後の記号 (T) によって識別され、SC1 の参加国団体が最終的な合意に達していないことを示します。
- *IBM Dictionary of Computing* , New York: McGraw-Hill, 1994.
- Internet Request for Comments: 1208, *Glossary of Networking Terms*
- Internet Request for Comments: 1392, *Internet Users' Glossary*
- *Object-Oriented Interface Design: IBM Common User Access Guidelines* , Carmel, Indiana: Que, 1992.

この用語集では、次のように相互参照を示します。

～と対比：

反対の意味または実質的に異なる意味をもつ用語を示します。

～の同義語：

より適切な、同じ意味をもつ用語を示します。この用語はこの用語集に定義されています。

～と同義：

これは、定義された用語から、同じ意味をもつ他のすべての用語への逆方向参照です。

～を参照：

最後のワードが同じである、複数のワードから構成される用語を言及します。

～も参照：

関連してはいるが、同義ではない意味をもつ用語を言及します。

A

アドレス (address) . データ通信において、ネットワークに接続されるワークステーションあるいは各装置に割り当てられる固有のコード。

アドレス・マスク (address mask). インターネット・サブネットワーキングにおいて、IP アドレスのホスト部分のサブネットワーク・アドレス・ビットの識別に使用される 32 ビット・マスク。サブネット・マスク (*subnet mask*) およびサブネットワーク・マスク (*subnetwork mask*) と同義。

アドレス解決プロトコル (ARP). インターネットのプロトコルにおいて、IP アドレスをイーサネットやトークンリングなどのサポートされている LAN で使用されるアドレスに動的にマッピングするプロトコル

アラート (alert). 問題や差し迫った問題を識別するために、ネットワーク内の管理サービス・フォーカル・ポイントに送られるメッセージ。

米国規格協会 (American National Standards Institute (ANSI)) . 公認の組織が使用して米国内において自主的な業界標準を作成し維持するための手順を確立する、生産者、消費者、および一般利益グループによって構成される組織。 (A)

B

ブートストラップ (bootstrap). (1) 一連の命令で、その実行によって完全なコンピューター・プログラムが保管されるまで追加の命令がロードおよび実行される。 (T) (2) 独自の処置によって自らを必要な状態にするよう設計された手法または装置。たとえば、最初のいくつかの命令によって残り全部を入力装置からコンピューターに入るマシン・ルーチン。 (A)

C

クライアント (client). (1) サーバーから共用サービスを受ける機能単位。 (T) (2) ユーザー。

クライアント/サーバー (client/server). 通信において、分散データ処理での対話のモデルで、1つのサイトのプログラムが別のサイトのプログラムに要求を送り、応答を待つもの。要求を出しているプログラムをクライアントと呼び、応答しているプログラムをサーバーと呼ぶ。

コミュニティ (community). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、エンティティー間の管理上の関係。

コミュニティ名 (community name). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、コミュニティを識別するオクテットのストリング。

構成レポート・サーバー (Configuration Report Server). トークンリング・マネージャーの機能で、ステーション情報の入手、ステーション・パラメーターの設定、およびリング上のステーションの除去を行うためのコマンドを受け入れる。また、リング上でステーションによって生成された構成報告を収集し転送する。

CRS. 構成レポート・サーバー (Configuration Report Server)。

D

省略時 (default). 明示的に指定されていない場合に仮定される属性、状態、値、またはオプションに関する用語。 (I)

E

EIA 232. データ通信においては、シリアル・バイナリー・データ交換を用いた、データ端末装置 (DTE) とデータ回路終端装置 (DCE) の間のインターフェースを定義する電子産業協会 (EIA) の仕様。

米国電子工業会 (Electronic Industries Association (EIA)). 業界の技術的成長を促進し、各メンバーの意見を代表し、業界標準を開発するために組織された、電子機器製造業者の団体。

H

ハイパーテキスト・マークアップ言語 (HyperText Markup Language (HTML)). SGML 文書タイプ定義 (DTD) によって指定され、すべての WWW サーバーによって理解されるマークアップ言語。

I

インターネット (internet). ルーターの集合によって相互接続されたネットワークの集合で、それらのネットワークが単一の大規模ネットワークとして機能することを可能にする。インターネット (*Internet*) も参照のこと。

インターネット (Internet). 大規模国家基幹的ネットワークや世界中の多数の地域およびキャンパス・ネットワークで構成され、インターネット・アーキテクチャー・ボード (IAB) によって管理される、世界最大の国際ネットワーク。インターネットはインターネット・プロトコルを使用する。

インターネット・アドレス (Internet address). IP アドレス (*IP address*) を参照。

インターネット・プロトコル (IP). ネットワークまたは相互接続されたネットワークを通じてデータを経路指定するコネクションレス型プロトコル。IP は、上位のプロトコル層と物理ネットワークの間の仲介として働く。ただし、このプロトコルは、エラー回復およびフロー制御を提供せず、物理ネットワークの信頼性を保証しない。

IP アドレス (IP address). インターネット・プロトコル、標準 5、コメント要求 (RFC) 791 によって定義された 32 ビット・アドレス。通常、ドット 10 進表記で表記される。

L

リンク接続(link-attached). (1) データ・リンクによって制御装置に接続されている装置に関する語。 (2) リモート (*remote*) と同義。

ローカル (local). (1) 通信回線を使用せずに直接アクセスされる装置に関する用語。 (2) リモート (*remote*) と対比。

M

管理情報ベース (Management Information Base (MIB)). (1) ネットワーク管理プロトコルを使ってアクセスすることができるオブジェクトの集合。 (2) 管理情報の定義であり、ホストまたはゲートウェイから入手可能な

情報および許容される操作を指定する。(3) OSI では、開放型システム内の管理情報の概念的リポジトリ。

管理ステーション(management station). インターネット通信において、ネットワークのすべてあるいは一部を管理する責任を負うシステム。管理ステーションは、シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル(SNMP)などのネットワーク管理プロトコル手段により、管理されるノード内に存在するネットワーク管理エージェントと通信する。

マークアップ言語 (markup language). アプリケーション指向の言語で、ロー・テキストに手順および記述のマークアップを挿入することによって、ロー・テキストを構造化された文書に変換するよう設計されたもの。マークアップ言語の例としては、HTML、DCF、PAGE、SCRIBE、SCRIPT、および SGML がある。

マスク (mask). (1) 別の文字パターンの一部の保存または除去を制御するために使用される文字パターン。(I) (A) (2) 別の文字パターンの一部の保存または除去を制御するために、文字パターンを使用すること。(I) (A)

モデム (変復調装置) (modem (modulator/demodulator)). (1) 信号の変調および復調を行う機能単位。モデムの機能の1つは、アナログ伝送施設を通してデジタル・データの伝送を可能とすることである。(T) (A) (2) コンピュータからのデジタル・データを通信回線で伝送できるアナログ信号に変換し、受信したアナログ信号をコンピュータ用のデータに変換する装置。

P

パケット・インターネット・グローパー (packet internet groper (PING)). TCP/IP ネットワークによって使用されるプログラムで、あて先にインターネット制御メッセージ・プロトコル(ICMP) エコー要求を送信し、その応答を待つことによって、あて先に到達する機能をテストする。

ファントム電圧 (phantom voltage). トークンリング信号に重ね合わせられる DC 電圧で、ステーションをリングに挿入できる準備ができていないことをトークンリング集線装置に知らせるために使用される。

R

REM. リング・エラー・モニター (Ring Error Monitor)。

リモート (remote). (1) 電話回線を介してアクセスされるシステム、プログラム、あるいは装置に関すること。(2) リンク接続 の同義語。(3) ローカル と対比。

リング・エラー・モニター (ring error monitor (REM)). トークンリング・マネージャーの機能で、単一のトークンリング・ネットワーク上でトークンリング・ステーションによって送信された回復可能および回復不能エラー報告を検出、収集、分析し、障害の分離と訂正を助ける。

リング・パラメーター・サーバー (Ring Parameter Server (RPS)). この機能は、操作パラメーターが管理されている各リング上にある。この機能は、リングに接続される新規ステーションに初期化情報を送信し、リング上のステーションが操作パラメーターに一貫した値をもつようにし、リングに接続するステーションから LAN マネージャーに登録情報を転送する。

RPS. リング・パラメーター・サーバー (Ring Parameter Server)。

S

サーバー (server). ネットワークを介してワークステーションに対して共用サービスを提供する機能単位。たとえば、ファイル・サーバー、印刷サーバー、メール・サーバー。(T)

シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (Simple Network Management Protocol (SNMP)). インターネットのプロトコル・スイートでは、ルーターおよび接続されたネットワークを監視するために使用されるネットワーク管理プロトコル。SNMP はアプリケーション層プロトコルである。管理される装置に関する情報は、アプリケーションの管理情報ベース (MIB) で定義され、保管されている。

サブネット (subnet). (1) TCP/IP において、IP アドレスの一部によって識別されるネットワークの一部分。(2) サブネットワーク (subnetwork) の同義語。

サブネット・アドレス (subnet address). インターネット通信において、ホスト・アドレスの一部がローカル・ネットワーク・アドレスとして解釈される基本 IP アドレス方式の拡張機能。

サブネット・マスク (subnet mask). アドレス・マスク (address mask) の同義語。

サブネットワーク (subnetwork). (1) 同じネットワーク ID などの共通の特性を持つノード・グループ。(2) サブネット (subnet) と同義。

サブネットワーク・マスク (**subnetwork mask**). アドレス・マスク (*address mask*) の同義語。

T

Telnet. インターネット・プロトコルにおいて、リモート端末接続サービスを提供するプロトコル。これによって、1つのホストのユーザーがリモート・ホストにログオンし、そのホストに直接接続された端末ユーザーとして対話できる。

伝送制御プロトコル (Transmission Control Protocol (TCP)). ネットワーク間プロトコルに関する米国国防総省の標準に従う、ネットワークならびにインターネットで使用される通信プロトコル。TCPは、パケット交換通信ネットワーク内およびそのようなネットワークの相互接続されたシステム内のホスト間で信頼性の高いホスト間プロトコルを提供する。基本プロトコルとしてインターネット・プロトコル (IP) を使用する。

伝送制御プロトコル/インターネット・プロトコル (Transmission Control Protocol/Internet Protocol (TCP/IP)). ローカル・エリア・ネットワークと広域ネットワークの両方について対等通信接続性をサポートする通信プロトコルの集合。

トラップ (trap). シンプル・ネットワーク・マネージメント・プロトコル (SNMP) において、例外状態を報告するために管理ノード (エージェント機能) によって管理ステーションに送られるメッセージ。

簡易ファイル転送プロトコル (Trivial File Transfer Protocol (TFTP)). 最小のプロトコルを使用してホスト間でファイルを転送するプロトコル。

U

ユニフォーム・リソース・ロケータ (uniform resource locator (URL)). HTML 文書および WWW で、情報源を表す一連の文字。この一連の文字には、(a) 情報源へのアクセスに使用されるプロトコルの省略名、および (b) プロトコルが情報源を見つけるために使用する情報が含まれる。

ユーザー・データグラム・プロトコル (User Datagram Protocol (UDP)). (1) TCP/IP において、インターネット・プロトコル層上に直接構築されるパケット・レベル・プロトコル。UDPは、TCP/IP ホスト・システム間のアプリケーション間プログラムに使用される。(2) 1つのマシンまたはプロセス上のアプリケーション・プログラマーが、別のマシンまたはプロセス上のアプリケーション・プログラムにデータグラムを送信できるようにす

る、インターネット・プロトコル。UDPはインターネット・プロトコル (IP) を使用してプログラムを送達する。

W

ウェブ・ブラウザ (web browser). ユーザーがハイパーテキスト・リンクを介してインターネット WWW をナビゲートできるようにする、クライアント・プログラム。これらのリンクはユニフォーム・リソース・ロケータ (URL) と呼ばれ、各文書のプロトコル、位置、およびファイル名を指定する。文書は、テキスト、グラフィックス、ビデオ、オーディオのいずれでもかまわない。

ワールド・ワイド・ウェブ (World Wide Web (WWW)). (1) インターネット上を行き来する、グローバルで対話式の、動的プラットフォーム間分散グラフィカル・ハイパーテキスト情報システム。(2) 国家間の仮想ネットワーク・ベース情報サービスで、特定のハイパーテキスト形式でオンライン情報を提供するインターネット・ホスト・コンピューターで構成される。(A)

索引

日本語, 英字, 数字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[カ行]

構文図、使用 1
構文図の使用方法 1
コマンド 5

[サ行]

順次パラメーター、例 1
スクリプトのクリア 68
スクリプトのコピー 68
スクリプトの削除 68
スクリプトの実行 68
スクリプトの挿入 68
スクリプトの置換 68
スクリプトの追加 68
スクリプトの編集 68
スクリプトの命名 68
スクリプトのリスト 68

[ハ行]

パラメーターの選択、例 1
分割、例 2

[数字]

802.5
clear counter 7
display counter 18

B

BOOTP 5
bootp
clear, bootp_result 6
display 17

C

CLEAR
ACCESS_CONTROL_LIST 5
ARP_CACHE 6
BOOTP_RESULT 6
COMMUNITY 7

CLEAR (続き)
COUNTER 7
EVENT_SCRIPT 8
GROUP
NAME 9
PORT 9
LOGIN 11
RMON 11
SCHEDULE 13
SECURITY
INTRUDER_LIST 13
PORT 14
TRAP_COMMUNITY 15
TRAP_LOG 16
TR_SURROGATE_REM_SOFT_ERROR 15
clock
replicate 64
set 71
community
clear 7
display 18
set 72
configuration, load 61
control_io, wrap/unwrap 105

D

data_io, wrap/unwrap 105
DISABLE
BOOTP 47
GROUP 47
PORT 48
PORT_SETTING 48
PURGE_ON_INSERT 50
RING_IO 50
RMON 51
SCHEDULE 52
SECURITY_PORT 53
TRAP_SETTING 59
TR_SURROGATE
CRS_TRAPS 53
REM_STATUS 54
RPS_TRAPS 57
SURR_STATUS 58
DISPLAY
ACCESS_CONTROL_LIST 16
BOOTP 17
CLOCK 17
COMMUNITY 18
COUNTER 18

DISPLAY (続き)

- EVENT_SCRIPT 19
- GROUP 20
- HUB 21
- INVENTORY 21
- IP 22
- LOGIN 22
- MANAGEMENT_INTERFACE 23
- NETWORK_MAP 23
- PORT 25
- RING_IO 25
- RMON
 - ALARM_DATA 26
 - CONTROL 27
 - EVENT_DATA 27
 - GROUP_STATUS 28
 - HISTORY_ML_DATA 29
 - HISTORY_P_DATA 29
 - HOST_DATA 30
 - LOG_DATA 31
 - MATRIX_DATA 31
 - RINGSTATION_DATA 32
 - STATISTICS_DATA 33
 - TOPN_HOSTS_DATA 34
- SCHEDULE 34
- SCRIPTS 35
- SECURITY
 - INTRUDER_LIST 36
 - PORT 36
- STACK 37
- TERMINAL 37
- TRAP_LOG 45
- TRAP_SETTINGS 45
- TR_SURROGATE
 - CRS_STATION 38
 - CRS_STATUS 39
 - REM_ERROR_MAC_FRAME 39
 - REM_ISOLATING 40
 - REM_LAST_BEACON 40
 - REM_LAST_SOFT_ERROR 41
 - REM_NONISO_THRESHOLD_EXCD 42
 - REM_STATUS 42
 - REM_TOTAL_NONISO_SOFT_ERROR 43
 - RPS_STATUS 43
 - SURR_STATUS 44
- WRAP_POINT 46

E

ENABLE

- BOOTP 47
- GROUP 47

ENABLE (続き)

- PORT 48
- PORT_SETTING 48
- PURGE_ON_INSERT 50
- RING_IO 50
- RMON 51
- SCHEDULE 52
- SECURITY_PORT 53
- TRAP_SETTING 59
- TR_SURROGATE
 - CRS_TRAPS 53
 - REM_STATUS 54
 - RPS_TRAPS 57
 - SURR_STATUS 58

H

- hub, display 21

I

- ip
 - display 22
 - set 79

L

- LOAD 61
- login
 - clear 11
 - display 22
 - replicate 64
 - set 79
- LOGOUT 62

M

- mib2_interface
 - clear counter 7
 - display counter 18

N

- name
 - clear group 9
 - set group 74
- network_map
 - display 23

O

- operational_code
 - load 61

operational_code (続き)
 replicate 65

P

PING 63
port
 clear group 9
 set group 75
ports_io, wrap/unwrap 105
port, display 25

R

REPLICATE
 CLOCK 64
 LOGIN 64
 OPERATIONAL_CODE 65
RESET_HUB 65
RESTORE_TO_FACTORY_DEFAULT 66
RETRIEVE 66
ring_io
 display 25
 enable/disable 50
 wrap/unwrap 105

S

SAVE 67
schedule
 clear 13
 display 34
 set 95
SCRIPT 68
SET
 ACCESS_CONTROL_LIST 70
 BOOTP_SERVER 70
 CLOCK 71
 COMMUNITY 72
 EVENT_SCRIPT 73
 GROUP
 NAME 74
 PORT 75
 HUB
 BEACON_THRESHOLD 75
 CHANGE_HUB_ID 76
 RENUMBER_HUB_IDS 77
 RING_SPEED 77
 SPEED_THRESHOLD 78
 IP 79
 LOGIN 79
 MANAGEMENT_INTERFACE
 802.5_GROUP 81

SET (続き)

 MANAGEMENT_INTERFACE (続き)
 ACTIVE_MONITOR_PARTICIPATION 81
 ADMINISTRATIVE_MODE 82
 ARP_RESOLVE_METHOD 82
 DIAGNOSTICS_WRAP 83
 EARLY_TOKEN_RELEASE 84
 LOCALLY_ADMIN_ADDRESS 85
 MAC_ADDRESS_TYPE 85
 RMON2_MODE 86
 RPS_TRAPS 87
 SURROGATE_GROUP 88
 SYSTEM_CONTACT 88
 SYSTEM_LOCATION 89
 SYSTEM_NAME 89

 RMON

 ALARM 90
 EVENT 92
 HISTORY_CONTROL 93
 TOPN_HOSTS 94

 SCHEDULE 95

 SECURITY_PORT

 ACTION_ON_INTRUSION 96
 CAPTURE 97
 MAC_ADDRESS 98

 TERMINAL

 BAUD 99
 PROMPT 100
 TIMEOUT 101

 TRAP_COMMUNITY 103

 TR_SURROGATE

 CRS_STATION 102
 SEGMENT_NUMBER 103

 speed_detect

 enable/disable port_setting 48

U

UNWRAP 105

W

WRAP 105



Printed in Japan

GA88-6486-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12